涙もかすみけり梅に
もくもろおぼろ月夜
に(左近衛少將具親)
芦の葉もまだうらわ
かみ津の國のこやの
へだてはかすみなり
けり
時しもあれ頼むのか
りのわかれさへ花ち
る頃のみよしのゝさ
と
敷妙の枕のうへにす
ぎぬなりつゆをたづ
ぬる秋の初風
月の秋は名のみぞよ
るの藻鹽草かくかき
たえて見るゆめもな
し

る。寂しいに似て寂しいといふ所までは行かず、一味の靜かさを愛するといふ心持が髣髴として浮んで來る、そして其心持は、説明によつてゞは無く、掌の上におどけたる一寸法師の現はれ來つて、我れに踊つて見せよといふ事で現はして居る。そして此歌を讀むと、第一に斯う言つて居る者の姿が思はれ、其居る所が思はれ、そして最後に、其人の心持が感じられて來るのである。即ち客觀的に感じられるのである。

若し此作を、かういふ風に客觀にせず、一に主觀的に現はさうと假定したらば何うであらう。秋の夕、獨居の胸に浮ぶ感じ、さういふ境は歌人の愛して歌つた境で、恐く同じ意味の作も多いと思ふ、其例に倣つて主觀的に歌ふとしたならば、誠に何う現はすのであらう。何う歌つたならば此れだけの感情が、洩れなくも現れるのであらう。かう思つて我々は其答に窮するのを切に感じる。

はれくもるかげを都
にさきだてゝしぐる
とつぐる山のはの月
詠めよとおもはでし
もやかへるらむ月ま
つ浪の海士の釣ぶね
さよ千鳥湊吹きこす
鹽風に浦よりおちの
友さそふなり
今よりは木の葉がく
れもなきものを時雨
にのころ村雲の月
何とかは人は分くべ
きおく山に入りなば
とぢよ苔の下道
○
くれなゐのこぞめの
糸の村時雨山のにし

以上は主觀の歌と客觀の歌との比較のやうに見えるが、此所で言はうとするのは比較での意味では無い、何方がより多く離れたる態度を執りやすいかといふ一つの例に過ぎない。

短歌の上には主觀の作が多い。此れは然うあるべき事である。此等主觀の歌は最も離れたる態度を執らなければならない。

主觀の歌で優れた歌と言はれる限りの物を讀むと、我々離れざる條件として、其主觀的の言葉を通じて、其所に、一言も語られずに居る所の作者の面目を思ひ浮べて來る。

夜をこめて小き襯衣を縫ひいでしよろこびなどもあはれなるかな

此れは主觀的の作で、必ずしも優れて居るといふ意味で擧げたのでは無い、手近にあつた爲めに擧げたのである。試みに此作を讀んで見給へ。

きをおらぬ日ぞなき
（侍從隆祐）

世の中になほありあけの浮き身をやつれなきものと月は見るらむ

いかにせんくれをまつべき命だになほたのまれぬ身をなげきつゝ

水上に氷をくゝるしかま河うみにいでゝや波はたつらむ

けふまでは都もちかし相逢の關のあなたにしる人もがな

この世にはよしことはじすみだ川住みえぬかたの鳥の名もうし

かぎりあればかすまぬ浦の波間より心ときゆる海士の釣ぶね

吹く風にけむりやとほくなびくらん里なき浦ももしほやきけり

かにもかくいな野の原の草枕さてもねられぬ月をいるかな

行く月のみふれながるゝ天の川山より西やみなとなるらむ

○

春雨に野澤の水はまさられどもえ出づる

此所に歌はれて居るのは、夜を更して小な襯衣を縫つて、縫ひ終つて嬉しいと思つた。が、やがて、斯ういふ事などを喜びにする樣な身に成つたのかと思ふと、我ながら自分があはれに感じられたと言ふのである。

此歌は見る通り全くの抒情である、多少の叙事の入つて居ないでもないが、全體は抒情である。そして無論此歌を歌つて居る者の如何なる境遇のものと言ふ如き事は、少しも言つてゐない。併し我々は此歌を讀むと、此歌を歌つて居る者の境遇も心持もはつきりと感じられる。女が既に母となつて、子の爲めに自身襯衣を縫つてやつて居る。晝は障る事があるか何かして、夜を更かして縫つて居る。縫つてしまつて、嬉しいといふ心持がしたが、それと共に斯ういふ事――自ら襯衣を縫つてやるといふ斯ういふ佗しい事までも喜びとするやうな身に成つたかと思ふと、そゞろに自分の以前の身が、思ひ出されて、現左があはれに成つたといふのである。即ち歌はれて居る者の生涯から、現在の心持までが、此抒情の言葉を通して感じられるでは無いか。歌つてある事柄は、極めて些細な、日常生活の中に幾らでも零れて居るやうな事であるか、其れが、此後景と相對して、如何にも味深く感じられるのである。

何故に抒情ばかりの歌で、そして大した事は歌つて居ないにも關らず、斯うまで深い味を持つてゐるのかと思ふと、我々は作者が如何にも離れた、餘裕のある態度で歌つて居る事を思ふ。自分の事を歌つて居るのであるが、さながら他人の事を歌つてゐるやうな有樣で歌つてゐる。その爲めにからいふ功果を收めて居るのであると思はずには居られない。

主觀の歌であると客觀の歌であるとに關らず、我々は努めて離れた態度を以て作をしやうと心懸けなくては成らない。自分の感情で

草ぞ深くなりゆく
（前但馬守源家長）

あつさゆみいちしの浦の春の月海士のたく縄よるもひくなり

秋の月しのに宿かるかげたかく小笹がはらにつゆふけにけり

秋の月ながめ〳〵て老が世も山のはちかくかたぶきにけり

しみぢばのちりかひくもる夕時雨いづれか道とあきのゆくらむ

けふもまた知らぬ野はらに行きくれぬいづれの山か月はいづらむ

きぬ〴〵のつらきためしに誰れありて釉のわかれをゆるし初めけむ

いづくにもふりさけ今や三笠山もろこしかけていづる月かげ

もしほ草かくともつきじ君が代のかずによみおく和歌の浦波

伊駒山よそになるおの沖にいでゝ目にもかゝらぬ峯のあま雲

○

ながむれば千々にものおもふ月にまたわが身ひとつの峯の松

はあるが、他人の感情であるやうにして歌ふまでの離れた態度が欲しい。

自分の感情――自分一人の私事であるが、それが一旦作となると、何百人何千人の心の奥にまで一様に響くといふのは、其感情の優れて居るにもよるが、それよりも更に大いなる原因は、此離れた態度の持てるといふ所にあると思ふ。

二、説明

智識――主觀の誤れるもの――説明と感じ

離れたる態度といふ事に次いで、我々は今一つ注意すべき大事な問題のある事を思ふ。それは説明といふ事である。古くは斷るといふ言葉を以て表はして居るものである。

試みに一つの例を取つて見る。

天城野の木の下つゆは雨ながら空行く月は雲もかゝらず

此歌は古歌の中でも優れた歌の中に數へられて居るものである。が、我々之れを讀んで見ると、多くの興味を感じない。何所かまはりくどい、疎々しい所があつて、ぴたりと胸に入いつて來ない事を感じる。

何故であらうと、今一度讀み返して見る。すると此歌は、感情ばかりで歌つたつでは無い、大分智識が混つて居る。我々感情を求めて居るのに、求めるものは與へられずして、却つて他の物を與へられたといふ感がある。

此歌は、秋の夜、天城野に立つての感じである。木立生ひ重つて、露が雨のやうに滋く落ちる。仰いで見ると、月光さやかに照つて居るといふのである。巧拙は別として、若し此歌が作者が見て感じた

風　（鴨長明）

ながめてもあはれと思へおほかたの空だにかなし秋の夕ぐれ

松島や鹽くむ海士の秋の袖月はものおもふならひのみかは

初瀬山かれのひゞきにおどろけばすみけるる月の有明のそら

よもすがらひとり深山の槇の葉に蟲ともすめる有明の月

たのめおく人もながらの山にだに小夜ふけぬれば松風のこゑ

袖にしも月やどれとはちぎりおかず涙はしるやうつの山越

見れば又いとゞ涕のもろかずらいかにちぎりて影はなれけむ

いかにせんつひのけむりの果てならでたちのぼるべき跡も無き身を

すみわびぬいさゝはこえむ死出の山さてだに親のあとをふむやと

○

夕月よ鹽みちくらしなには江のあしのわかばをこゆるしらなみ　（藤原秀能）

足曳の山路のこけのまゝを歌つてあつたならば、我々も秋夜深林の中に至つた時に感じる一種の深い感を味へるべきである。又それが作者としても自然の事であらうと思はれる。然るに此歌は、我々が第一に感情に觸れて來るべきものを逸して、露を雨に譬へ、雨から雲を思ひ續けて居る。即ち雨の降る時には必ず雲のあるべきものといふ智識を豫め心に置いて、一切の興味を其所から割り出さうとして居る。感情で行くべきものを智識で行つて居るのだ。

年の内に春は來にけり一年を去年とや言はむ今年とや

言はむ

此れも古歌として名高い物の一つである、我々此歌を讀んで得る所の感じも、前の歌と異はない。

春は新年と共に來るべきものである。然るに、年内に春が來た。既に春である今、今は一體は去年と言ふべきであるか又は今年と言ふべきであるかと言ふのである。

此歌は前の歌よりも一層智識的である。感情で見るべきものを智識で見たといふ位では無くて、根本から智識である。多少感情の入つて居ない譯では無いが、それも唯作者だけの面白みで、言はゞつまらない事を我れ面白に面白がるといふに過ぎない。

短歌は情緒であるべき筈である、それが智識的になつて居るといふのは何故だらう。此所に引いた歌の如きは、もと〳〵優れた歌では無いから、此れを土臺とばかりしては言はれないが、我々は感情ばかりでは居ず、其感情の中に何時ともなく智識を加へて來るといふ傾向がある。そして智識を以て感情を批評しやうとする傾向があるらしい。例へば我々、人の死に逢つた場合、其死を悲しむに適當な感じ方をせず、要するに人生は無常なものだと思つてそれで諦めやうとする、さういふ歌も作る。又、戀といふ物の前に立つて、一

つゆのうへにねざめ
よふかき月を見るかな

草まくら夕のそらを
人とはゞなきてもつ
げよ初かりのこゑ

山里の風すさまじき
夕ぐれに木の葉みだ
れて物ぞかなしき

月すめばよものうき
くもそらにきえては
山がくれをゆくあら
しかな

下紅葉うつろひゆけ
ば玉ほこのみらの山
かぜさむくぞあるら
し

もしほやく海士の磯
屋の夕けむり立つ名
もくるしおもひ消え
なで

袖のうへにたれゆゑ
月はやどるぞとよそ
になしても人のとへ
かし

今こむとちぎりしこ
とをわすれずば此の
ゆふぐれの月やまつ
らむ

つゆをだに今はかた
みのふぢ衣あだにも
袖をふくあらしかな

（終）

種言ひ難い怖れを抱いて、躊躇する。そして其場合悲に對して適當な感じ方をせず、戀は苦しいもの、涙に終るべきものと理窟をつけて、其れで紛らさうとする、其心を歌にもする。――かういふ傾向は程度の差はあるが多少持つて居る所であるらしい。

我々が作歌をする場合、若し我々の感情の中に、此智識的の分子が入つて居ると、我々は自分の感情を抒情的に表はす事をしなくて、説明的に表はしてしまふ。情緒は如何なる形式を取るにしても、抒情的に現はすより外行き道が無い、併し智識は、例へ抒情の形を假りて居ても、大體に於いて説明といふ調子でなければ言ひ現はす方法が無いのである。説明といふものは、智識を地としなければ生える事の出來ないものである。

短歌で説明を避けると言ふ事は、言ひ換へれば智識といふ異分子を入れるな、純粹に感情ばかりで行けといふ事である。第一に感じた感情を歌はうと覗へ、其感情を今一度智識を以て眺め直すなといふ事である。

情緒であればこそ、我々は萬人同樣に、互に同じ物であると思へる、胸を開いて他と共に悲喜する事が出來る。併し智識になると、其人特有のもの、又は我々の後天的に作つたものだといふ感じが起る。そして其れを聞く場合、我々の智識に訴へて批判して見やうといふ氣になる。此所は文藝の境以外である。

豫め智識を頭に置いた作、智識によつて歌つて、原因結果の關係を見せた歌など、我々は少なからず見る、所謂斷つた歌である。斯ういふ事は、我々皆に字句の上で避けやうとするばかりでなく、一歩進んで、其説明とならざるを得ない原因、即ち智識といふ所まで遡つて、其避けなくては成らない事をよく〳〵明らかにして置きたいと思ふ。

香川景樹の歌論

▲はしがき

△香川景樹は近代の短歌界の巨人である。因襲久しく既に固定してしまつた短歌に、新たなる生氣を吹き入れて、之れを生命あるものと成らしめた人である。

△彼は固より歌人として立つて居た。盛んに作歌をした。併し其主張を貫く爲めとして、多くの歌論を吐いてゐる。此歌論は傾聽に値するものである。或は彼の作よりも、寧ろ此歌論の方により多くの價値があるのでは無いかと思はれる。

△彼の論じた所は、殆んど全部作歌の態度である。作歌をするに當つての作者の心持である。而して我々の聞いて利益する所も、煩瑣なる技巧の上の論よりも、此態度を確がにする上にあるのは云ふま

三、譬喩

強き感じ——聯想——適切なる譬喩——誤つたる譬喩

一首の言ひ表はし方といふ上から見ると、我々は譬喩といふものに就いて考へて見る必要がある。

我々或る境から一つの感じを得た、そして其れを語らうとする所が、一つの感じを得た場合には、我々の感情は自然の順序として、平常よりは高まつて居る。其れで、飜つて其感じを得た境を眺めると、此方の心持と其境とは一致しない感じがある。即ち感情は高まつて居るが、境は平靜に過ぎるといふ事を思はずには居られない。

斯う言ふ場合には、我々は唯平たく有りの儘の境を語つたゞけでは、自分の感じが寫せないやうに思ふ。今一層強く、豐かに、鮮かに感じを出さうとする。さういふ場合、現に其所にある物と何所かの點に就いて似通つてゐて、併も一層我々の感覺を刺戟する物を假りて來て其感じを表はす助けとしようとする。斯ういふ意味で我々の假り來たる物が所謂譬喩である。

金色の小さき鳥の形して銀杏散るなり夕日が岡に

此れは與謝野晶子女史の作である。夕日に照らされつゝ散る銀杏の葉、其黄な色、趣はあるには相違ないが、其趣はまだ淺い、銀杏の持つてゐる一種神秘的な趣までは出て來ない。さりとて此れを說明すると、益々趣に遠ざかる。さういふ時、「金色の小さき鳥の形」と言つて、其羽と、其羽の飜る樣とを譬喩してゐる。かう言はれると、我々は佛說で耳に馴れてゐる、かの極樂にゐる鳥を思ひ浮べる。そして此鳥と、其鳥とを思ひ合せて、何れが何れであるかといふ感じを起す。銀杏の持つてゐる神秘的の色彩は、此譬喩によつて、遺憾なく發揮されたのを思ふ。

でもない。

△景樹の反對して起つたのは、其當時の形式主義に對してゞある。形式主義に反對して、新しい運動を起したのである。即ち舊派に對する新派である。此意味に於いて、現在の短歌壇と多少似通つた所がある。

△我々が不思議に思ふのは、現在舊派と稱せられてゐる歌人の殆んど全部は、直接間接に、此新派の唱導者なる景樹の感化を蒙つてゐる、而して彼等は既に舊派と稱へられてゐるとである。併し我々第三者として見ると、景樹の彼等に教へてゐる所は、彼等が今日行ひつゝあるやうな物ではない、此點に於いて彼の歌論は、舊派の者をして反省せしむるに足りる。

△此所に紹介しやうといふのは、彼の歌論の一部である。遠方にあつて彼に親炙する機會のなくてゐ

事實、譬喩の持つてゐる力といふものは、驚くべきものである。有りとは思ふが手に取つては言はれぬ物など、此譬喩によつて、初めてまざ〳〵と眼に見るやうに感じられる。此れが無くては、意味を成さないといふ場合も少くはない。更に、此譬喩によつて、其れ程でもないもの、唯それだけでは、何うしても感じを傳へられないものが、強く鋭く、豊かに表はれて來て、遺憾なく感じを傳へるのは、我々の常に見る所だ。

或る歌人の天分が高いか低いか、といふ事を試驗する方法として、其作の中に、幾何の新たなる譬喩が有るか無いかといふ事を調べて見れば分るといふ事を聞いた事がある。如何にも然うだらうと思ふ。新たなる譬喩は、其人の聯想の力が強くなくては得られない。想像力が高くなくては出來ない事である。其物に醉ひたる情熱の度に伴つたものである。

譬喩は適切に語ると、其効果が著しいが、若し不適切であるならば、却つて感じを表はす上の邪魔になる。

感じは、直截に語られる程、我々に強く響く。曲折して言ふ場合は、曲折する事によつて、其趣を發揮するといふ必要によつて仕てゐるのだ。やはり曲折したといふ上に於て、直截に語る意味を失つてゐない。かの、無意味に持つて回つたといふ言ひ回し、此れは多くは厭味になる。安らかに感じて行かれる事を、理由なく邪魔をされて、感じ難くされたといふ心持がする。我々は不適切なる譬喩を用ゐられてゐる時に、此感じを抱く事が多い。

散文には然ういふ例が割合に少ないが、韻文の上では、譬喩がある爲めに、却つて分り難いといふ例が幾つもある。譬喩と、譬喩されてゐる物と、どちら〳〵に成つて、何方が何方とも、ちよつとは見分け難いやうなのがある。譬喩されてゐるものは感じやすい物で

る門人に對して、其詠草の奥に書きつけて送つたものである。即ち其人其人に對しての批評である。彼の意見として、面立しく、組織立てゝ云つた物ではない。しかも之れを通して、彼の意見の大體を捕捉する事が出來る。

△彼は情を盡して云つてゐる。序ながら送る書信であるが、熱誠を籠めて云つてゐる。此所に紹介する値かの物も、之れを熟讀したならば、必ず參考になると信じる。

▲秋兄公英が尋ねに答ふる文

歌は只實情を述ぶるのみ。淫欲もとより實情の外ならんや。實の實なるものか。より古今以後、是れを取り分けて戀歌と云ふ。其間なきにあらず。古へは婿住みとて、夫婦と成りても、只女の家に行き通ひて婚をなしし

あるのに、譬喩其物の方が、我々に遠い者であるといふ事がある。譬喩が、餘りにも突拍子な爲め、却て感じが纏らぬといふ者がある。

此等の譬喩は、其根本に於て誤つてゐる。本來の目的と反對の結果に成つてゐる。何故かういふ事が起るかといふに、さういふ譬喩は、情熱を以て捉へて來たものでなくて、智識を以て搜して來たものだ。即ち其場合、作者に聯想が起つたのでは無いが。譬喩といふのを用ひたいといふ所から、强ひて用つたものと思へる。或は、それ程でないまでも、用意が足りない所から起つたのだ。斯ういふ心持で用つた譬喩は、例へ、如何に巧みに用つてあつても、自然に空疎に感じられる。譬喩ばかり眼に着いて、感じの纏つて行く邪魔をする。まして、不用意に、譬喩の爲めの譬喩を用ゐるといふやうな事であると、其結果は前に言ふやうだ。一々正直に、さういふ物を用ゐない方が、遙に優つてゐる。

第六編

一、短歌と調子

調べ——感情と調べ——短歌の調——作者と讀者

韻文の散文と異なる所は、此れを形の上から見ると、一方は調子を重じてゐるに、一方は其れ程には重じない。嚴格なる制限がある と無いといふに過ぎない。新體詩と美文といふものを比較して見ると、直ぐに此所は解る。

作歌といふ事を言ふと、其れと同時に想ひ起すのは、調子である。「調べ」といふ言葉はやがて歌の全體であるやうに思はれてゐる。歌を作るといふ事は、此調べの呼吸を呑み込む事のやうにまでも感じられてゐたらしい。

也。さるは物語文などにて見るべし。さるから夫婦の間、常に戀々の情絶ゆる事なく、夜に行き曉に別るゝなど常の事にて、さる中にはおのづから、世に忍び親に隱るゝ節も交るべく、或は待ち、或は恨み、くさ〳〵の思ひ如何でか無からん。且つ郡縣の世は、大方旅住ひに似たり。時勢を知りてさる戀情を思ひ測るべし。今夫婦と云へば、晝夜さし向ひたる、何の暇に戀情か起るべき、却々うるさき方もや侍らん。さる習ひの心より古へを訝しみ、夜行き曉別るゝ歌なば、皆邪淫と思ひ取れるは誤なり。又たはれ亂れたる事も何どか無からん。古へはさるをも包み得ず、歌とよめるが故にあらはも也。後世は包みに包みて、中々操をつくり、正しき方に歌ひ成すべし。されば戀は題詠にとゞまれるなり。時と情と、古

實際、作歌の事を思ふ場合には、詩材といふ事は、既に解決されてゐるものとも見られる。詩材はある、此れを美文の形式で現はさうと思へば、多くの勞苦なく現はせる、併し、韻文の形式を假りると、一層其感じが適切に現はせるやうな氣がする。其所で、韻文の唯一の特色である所の所謂調べなるものが問題として起る。――かういふ順序のやうに思はれる。

我々は歌の批評を聞く場合、他の何事も言はず、唯誰の「調べ」は何う彼の「調べ」は斯うと、調べといふ一語によつて、其作者の全體が判じられるやうに言はれるのを聞く。そして此れが珍しくない例である。

此れ程まで重じられ、尊まれてゐる「調べ」といふものは、一體何であらう。

「調べ」に就いては、前に一わたり言つて置いた。樣々に言へば言はれるであらうが、我々は、簡單に、我々の感情も調子も要求してゐる。否、感情その物の中に、既に調子がある。そして、其れが多くを占めてゐるといふ、此れだけで滿足しやうと思ふ。

調子の持つてゐる力といふものは、實に不思議な位だ。

我々の多くは、其土地に限られた言葉訛を持つてゐる。此訛に馴れてゐる結果、他の訛を聞くと、一種異樣の感じがする。所で、其感じは、何所から起るかといふに、名詞だの働詞だのといふ重立つた品詞の異ひからでは無い。事實、現今のやうに交通の頻繁になつてゐる時代にあつては、品詞のまる〳〵異ふといふ事は多く無い。又有つたにした所が稀れだ。それで、訛といふのは、結局、饒舌つて行く其調子に過きない。

耳馴れない訛で話されると、我々は話手の意味を十分に判じられない。可笑しな訛で言はれると、悲しい事も失笑したく成る。滑稽

今逢へるけじめを知るべし。漢土も人情變るべきなられば、邪淫の振舞ひ往々かの文に著じるし。只詩と作り出さゞるのみ。彼方も後世〻、いとゞ飾りを旨とするより、おのづから云はざる也。されば戀歌をよみて戀情の催すにあらず、戀々の情より戀歌の出づる也。されは戒むる所、情にありて歌にあらず。此所と彼所とは、文質のたがひ有るを知つて後論ずべきか。只歌は眞實を述ぶるのみと云ふ事を敎へ諭す時は、兒女輩は戀歌はえよまじ也。えよまざれば、彼も好まず。此方よりも、さる題を與ふべきにあらず。古へ童の戀歌ある事なし。固より此情なければなり。又解き聞すに、さし合ふべきをいたまば、何ぞ戀歌のみならん。かの戴きまつる彼方の詩經と雖も、さるべき章のみ多かるべし。其れまでもなく、交な事も可笑しくなる。そして其れを聞くに、此方では直接に感情を以て迎へる事が出來ない、先づ我々の知を以て、其れを飜譯して、其れから感情に訴へやうとする。無意識ではあるが然うしてゐるらしい。

此れは、日常の談話——達意を主としてゐる談話の上でさへ然うだ。若し此れが、純粹に、感情ばかりを語る場合になると、斯ういふ意味は一層に強くなる。殆ど、話手の感情を傳へる事の出來ないといふ事が起つて來る。

此れと反對に、話手が、話の調子といふものを呑み込むでゐて話すと、聞手の方は、何時か知らず其調子に乘せられる。全く感情一遍に成つて、知らず識らず釣り込まれて行つてしまふ。此れも我々が、日常の談話の上でも、少なからず經驗する所だ。落語家、講談師など、其話の種は幾度も繰返したもので、とつくの昔に知つてゐる事、又其先も何う成つて行くかといふ事を知つてゐて、話其物としては、全く興味の無いものであるに關らず、我々は其れに聞き惚れる。何時か彼等の自由にされてゐる。此等は單に調子といふものばかりで持つてゐるのだ。

短歌の調子も、此れと同樣だ。否、話ならば、顏を見てしてゐるので、先方で感じなければ、幾らでも繰返して言へる。其れに、形式に束縛が無いから、長く話してゐる中には、一節や二節は、自分に面白い所も出て來る。所が、短歌になると、語らうとする所は、全然感情だ。形式も極めて窮屈だ。短く言ひ棄てゝ、其れ切りだ。それで若し此調子を誤つてしまつたならば、其歌は、啻に拙いといふばかりでは無い、全く無意味なものに成つてしまふ。調べが即歌であると言ふ事は、俄に肯い難い言葉であるが、短歌に於ける調子といふものが、如何に重要の位置を占めてゐるかといふ意味から言

會とは如何なる事、めあはすとは如何なる事と問はんを、答へんも差し合ひなきにあらず。程々に隨ひて說き成さん事、猶ほ平常に少なからず。何ぞ歌のみ之れを厭はん。是れを好く說き成さねば、解く人の心の卑しき也。又例へば、鰥の字を、如何でやむをと讀むぞと問はんに、獨住みの男は、夜の目も合はざる事魚の目に似たれば、其字魚に比ぶなりと云はんに、如何でやむをは目の合はざるやと再び問はゞ、如何答へん。妻なければなりと云ひて止まば、猶ほ可なり。妻なき人は如何で夜の目の合はざるやと、兒女輩は尋ねべし。其時、故を委しく答へんは、いと打ちつけにて、かの婉曲なる戀歌解かんよりは、解きにくかるべし。さるをも說がで止まんやは。さる意を推して、戀歌解く心をも識得し給ふべ

ふと、此言葉には立派に意味がある。動かし難い。

試みに、古來名歌として傳へられてゐるもの、又は、我々の胸に殘つてゐて忘れられず、ともすると、自然に口へ出て來る歌を取つて、其歌つてある意味と、其意味を傳へてゐる調子とを見給へ。

名歌と言つても、其意味から言ふと、必ずしもたいした物では無い。若し意味にあるといふならば、其意味を口語に書き代へても、其感じは傳はらなくては成らない。然うあつても宜く思はれる。所が、名歌であればある程、とても口語には移せない。三十一音の語つてゐる意味を、その十倍の文字、二十倍の文字に移さうとしても、移す事が出來ない。意味の上から見ると、其れが捉へられない筈も無く、捉へて、此れを移すに制限かない以上、如何なる形にでも代へられ無い筈はない。然るに、實際の場合には、何うしても此れが出來ない。仕ても〳〵まだ移せずにゐる何物かの殘つてゐて、併も其れか肝腎の物であるといふ氣がする。

此殘つてゐる肝腎なもの、此れ即ち其意味と即して離れずにゐる、其歌の持つてゐる調子では無いか。

作歌をするといふ以上、詩材を得、此れを纏める事が出來ても、更に進んで此調子といふものを會得しなければ駄目である。

作者と讀者とは、或る點までは共通であるが、其所を越すと、離れてしまふ。誰でも讀者とは成れるが、誰でも作者と成るといふ譯には行かぬ。此れは誰しも知つて居る所だ。そして、其別れ目といふのは、此調子を呑み込むと否とにある。

苟くも我といふものゝある限り、感じるといふ事は、自然にある。感じずにはゐられない。又、一度感じた感じは、此れを胸に蓄へて置ける。人生に對して、多少の感じの蓄への無い者はない、此所までは問題に成らない。所が、一歩進んで、感じた事を、感じたまゝ

じ。若し戀歌を知ると、處女をひき、人妻をよぼふ具なりと云はゞ、戀ならぬ歌にも、「まめなれど善き名も立たず苅萱のいざ亂れなむしどろもどろに」などの類いと多し。是れらを解き聞せば、賢子も懶惰に成るもの歟。詩歌はさる弊ある物にあらず。かへりて義氣に赴くものなり。歌を得て後之れを悟るべし。筆の盡す所にあらず。よし又說き聞かすとも、に語れ、生き〳〵と語れ、といふ事に成ると、我々は直に當惑してしまふ。即ち我々は讀者には成れる、一首の短歌によつて、自分の追臆を呼び覺まされて、新しい心持に成れるだけの神經もあれば、追臆もある。併し、其同じ物を、他に就いて語れと成ると、何物か一つの物を缺いてゐて、思ふやうに行かず無い。作者には成りにくいと言ふ事である。

調子を呑み込むと呑か込めないとが、讀者と作者との差別である。苟くも作歌をしやうとする以上、我々は此調子といふものに就いて多大の注意を拂はなければならない。

二、調子の習練

技巧――多作――古人の苦しみ――誘惑――自得の境

我々作歌の練習をしやうといふ場合には、既に思想といふものは

兒女は兒女のほどほど其意を獨り悟るべし。況や常の事實に就きて、何ぞ戀の情を解せざらん。歌の解を待つべきにあらず。未だ其情なき時は、說き聞すとも其情起らず、其情崩しては、說き聞せずとも其情止むべからず。歌によりて淫風を成せりと見ゆるは、もとより淫奔の人なり、歌の罪にあらず。又歌といふ筋を取りちがへたるなり。取りたがへたらあつて、唯如何に之れを現はすかといふ調子に就いて當惑して居る時である。一歩退いて考へて見ると、短歌は調子ばかりで出來るものでは無いが、實際の場合には、我々は斯ういふ有樣である。

我々歌はうと思ふ情緒は、ひとり手に得られる。ひとり手に得られ無いまでも、必ずしも短歌といふ門に依らずとも、他の方面に於てより多く得られる。思想を得る方法は作歌をする爲めに特に習練する必要は認めない。しかし調子の方は、然々習練である、習練するより外之れを得る方法が無い。思想の方を若し先天的の物だと言ふ事が出來るとすると、調子の方は後天的のものである、其れ位の懸隔はある。

調子といふものは、實際技巧である。習練するより他仕方が無いものである。作歌の手心を得るには、多讀すると多作するとにあるといふのは、直ちに移して調子の手心を得る上に當て箝める事が出

んには、何の道か害を成さどらん。

▲信濃人たすくが和文の奥に

文章は只義理のわかるを元とし侍れば、誰が聞きても、少しも聞き惑はぬが上手也。古今序、土佐日記などを見給へ、何れか聞えざる。中に聞き苦しき事あるは、時代の變りにて、今の言葉にあらざるなり。皆古への俗言なれば、其世の人は卑俗まで聞き知りし事なり。近き頃萬葉振りといふ事起りて、人の聞えぬ詞をつかふ事、口を開きて笑ふべき事に侍り。萬葉の歌も宣命の詞も、其世の人は少しも障りなく聞えし事なり。其世の俗言なればなり。時世移りて其詞いま無ければ聞き難きのみ。今の歌は固よりにて、狂歌も俳諧も、千歳の後には一緒に、何れ聞き取り難きと多く成り行くなり。

來る。

さて此調子とは何ういふ物であるかと言ふに、前にも一わたり言つた通り、自分の感情の調子を言葉に表はしたものである。自分の感情を説明を加へず、形を變へず、感じた通りそつくら言葉に表はしたものが即ち調子なのである。

されど、習練によつて得られるもの、全く技巧に屬する物だとは言ふものゝ、唯ばつと其れだけの物では無いと、定まつた目標があつて、其れへ向つて習練もし技巧も養つても行くのである。言ひ換へれば、自分の感情の調子を、そつくり出す爲めの習練をし、其上で自在に出來るといふ手心も得ようと言ふのである。

第一には作をして見る事である。

調子が技巧に屬して居る物である限り、我々が之れを得るには、何等の理窟も研究も要らない、專念稽古して見るといふのが、何よりも大事な事で、且つ最も捷徑である。

我々作歌を試みて、第一に思ふやうに行かない嘆きもするのは、此調子だ。作つて見ると、實に拙い。一首の歌の取り纏めは附く、言ひ表はし方も定つて居る、もう其れを定つた順序によつて言つてしまへば可いのであるが、其單純な樂に見える所へ行つて、不思議なくらゐ出來ない、何よりも面倒な事になつて來るので、思はぬ敵に逢つたやうな驚きをする。

例へば我々、非常に骨を折つて、一首の歌を作つた。其苦勞を思ふと、確かに佳い作でなくてはならないと思つて居る。所が暫く經つて讀んで見ると、案外にも面白く無い。何故だらうと思つて仔細に調べて見る。一首の思想もよい、之れを現はす形式も誤つては居ない、修辭の上の缺點も見えない、直すべき餘地が無いやうな氣がする。其れで居て矢張り面白くないのは事實だ。終に我々、其歌は

り。文句は古今に隨ひ、都鄙によりて變り行く物なれば、短み難き物なり。此調のみは、古今を貫徹するの具にて、聊かも違はざる也。只大和詞のみならず、唐も蝦夷も、變らぬ物なり。されば此調といふ物を捨てゝ、歌はなき事に侍り。さて其調は如何なる物ぞといふに、常に云ひ扱ふ平語、聊かも調に違ひたる事なし。さらば平語ぞ規矩なるべき。歌は此調子を失つて居る、調子の上に缺けた所があるといふ事を發見する。譬へて見れば、人間を描いた繪で、骨組みは立派に出來て居るが、表情が表はれて居ない。形から見ると立派な人間である譯だが、其人間の生命の色が出て居ない、木偶に過ぎない繪だと思ふ其れと同じ事である。

我々さういふ時に、俄に失望してしまつてはならない、新しい勇氣を起して、今一度、自分の感情の調子を出さうと試みないである。或は、暫く其儘に投つて置いて、我々の感情で温め直して、そして靜かに今一度作り直すのである。

此調子の出ないといふ嘆きの上では、我々を勵ます所の幾多の例がある。

我々其作を讀むと、唯其巧妙なのに驚嘆するばかりのやうな作の多くを殘して居る詩人でも、詩といふものは手でもつて水を掬つて飲むやうなものである、掬ひ取つて口まで持つて來る中に、其大部分は漏れてしまふといふ意味の嘆きをしたのを聞いた。又、我にして思ふ事の十分の一が言へたならば、多少は見榮えのする作も出來やうものをと言ふのも聞いた。此等高名なる詩人が、若し他人に見せて笑はれないだけの作をしやうといふだけの標準で作詩をするとしたならば、何も此樣な嘆きをするには當らない、易々として幾らでも作れるのであらう。それを惱んで痩せてまで作をするのは、他に理由のあるのでは無い、一意自分の氣に叶つたものにしようとするのであらう、感情の調子のそつくらと現はれた、自分としては此れより他に仕方の無い、此れで十分だといふものにしやうとしてゞあらう。

斯ういふ時には、我々は得て誘惑に罹りやすい。難きを避けて易きに附かうとする、見榮えのしない事で苦勞をするよりも、もつと平語に歸るのみ。歌を平語の外に求むるは、水にそむきて魚を得んとするなり。終に其功あるべからず。平語の調を歌に移さんとするに、習ひ性となりて、たやすく成り難し。さるを一事に得るは誠なり。誠は眞心なり。此眞心の眞心なる事を知れば、ひとり越く事なり。其眞心は如何にして得んといふに、名利心を離るゝより早きはなし。されど此名利の飾り

もの、一朝一夕に破り離き事、戀の奴の打てども去らぬ類にして、こはおれらが痴れ心にて、頓にやらふ心ならねど、彼の眞心を妨ぐる物ならば、行かぬなりに、やらほんとせでは叶ふべからず。此境を申かはし侍りて、歳月よみ試み侍らば、千歳の上に及び、千歳の下に恥ぢざる歌も、如何でかは出で來ざらん。一度かく契を結び侍りては、かたみに絶えざらん事をのみ願ひ侍り。兎角實物實景につれて、さら〳〵とよみ習ひ給へ。御好きと見受け侍るが故に、心もせで申入侍る也。あなかしこ。

▲法性寺水月が詠草に

人と生まれて言語なき事能はず。言語ありて調なき事能はず。されば俗言平語に、いまだ調の叶はざるを聞かず。只歌といへば、誰れの人も調を失ふ也。されば樂でそしてもつと見榮えのする方法を取らうとする心を起しやすい。

其れは何かと言ふと、我々他人の優れた調子を學ばうとするのである。散文のやうな長い形式のものであると、他人の文體といふものは然う容易くは學べない、又文體その物に其れ程の力も無いのであるから勞苦してまでも學ぶといふ愚はしない、巧みに仕おほせてからが、之れを他人の眼で見る場合には、一讀模倣の跡が見えるといふ制裁がある。然るに短歌のやうな短い形式の物になると、他人の調子といふものは學びやすくして、併も際やかに眼には着かないといふ利がある。それで態とする程では無いとも、自分が困り果てた後、他人の優れた調子を見ると、知らず識らず其れに曳きずられて、つひ眞似をしてしまふといふ淺ましい事に落つて行きやすい。調子といふものは繰返して言つた通り、我々を離れて、外部に浮動して居るものでは無い、我々の中にあつて丁度に捉へられずに居るといふに過ぎないものだ。それで我々自分の感情を歌はうとして、他人の調子を假りるといふ如き事は、自分の體に他人の生命を入れて得意とするに同じやうな事だ。誰しも自分に取つては自分が多い、自分の爲めには自分を發揮するべきである。模倣は此意味に於いて大いなる墮落である。我々此れだけは斷じて避けなくてはならない。

苦勞して作をして居る中には、我々何時か本當の調子に捉り當てる、無い物を捜すのでは無くて、もと〳〵自分の中にあつて一時見えずに居る物を捜すのであるから、熱心になれば捉し當てられるといふのが自然の順序である。

苦勞した報酬として、我々はひよつとして所謂會心の作といふものを得る事がある。會心の作とは如何なるものであらう。

ば幼童の人の歌に、調の叶はぬを見し事なし。是れ又他なし、俗言を分つ意を知らざればなり。さて其俗言の調に叶へるは、只思ふまゝを述べて、人の聞きを諂らはざればなり。假りにも人の聞きを街へば、俗言と雖も、忽ち調の亂るゝ事麻の如し。御尋れに、例へ調てふ事を會得しつゝを後にても、必ず歌毎に、かの調に叶ふ歌を詠み得る事にしもあらざるか、とあるは幼なし。調を會得するは、自然の上を得るなり。自然即ち誠實のみ。自然の上にたがふ事あるべきならんや。悲しき事に涕泣するは自然なり。是れを不圖、悲しき事にも笑ふ事あらんかと疑ふ如きの惑ひなり。極めて有るまじき事に侍るなり。又詠歌大概に、詞は古く意は新しくと云へるを取り給ふは當らず。何ぞ詞の古きを捨ばん。何ぞ意の

我々多くの心構もなく、又苦勞もしずに、ふつと一つの歌が出來る。胸に蟠つて居たものが、ひとり手に安々と生まれてしまつて作つてしまふと胸が輕くなつたといふやうな作である。さういふ作の出來た時には誰しも心持のよい物である。

さて其作を讀み返して見る、思想もさして優れては居ない、修辭もさう整つて居るとも思へない、直せば幾らでも直せさうに思ふ。が、手を着けやうとすると、何うも手が着かない、何所か胸に響く所があつて、此れで十分だといふ自信が起つて來る、何が好いのか知らないが、自分には嬉しい所があるやうに思へる。所謂會心の作だ。

かういふ作には調子があるのだ。調子が丁度に出て居るので、他に如何なる缺點があつても、其れに優る所の物があるのである。——苦勞して求めて居た所の調子が、偶然にも手に載つて來たのである。

たま〳〵ある此會心の作が、十首二十首と重つて行く中には、我我は何時か調子といふものを自得して來るのである。

三、讀書

調子の土臺——好きな調子——音讀——訓味

調子は自分で作を試みて、其中に自ら悟得するのを待たなくてはならないが、其れと同時に、一方では讀詩といふ事を努めて行かなくてはならない。

はつきりと自分の調子といふものを拵へ上げるのは、其れは作歌の結果であるが、しかも調子といふものゝ土臺を得るのは、我々讀詩の上に於いてゞある。順序を言ふと、我々は作歌に先だつて、讀詩の時期が來る。此讀詩の時期に於いて、作歌の面白みも想像さ

新しきを撰ばん。ただ此調をもて、此心を述ぶるのみ。猶ほ疑はしきは問ひこし給ふべし。具さなる事は、打ち向ひ侍らばと書き殘し侍り。あなかしこ。

▲丸山辰政が詠草に

「隣のは我かたざまに咲き出でゝあるじたがへる朝がほの花」

「夕べ／明日さく花のあらましを心にしめて見るぞ樂しき」

本の句餘り平凡にて、末も主人を取り違へし事とは聞え難く、主人が間違ひしやうに聞え候。申すまでも侍られど、歌は言語の精なる物にて、平語には入り組みて聞き取り難き事も、歌と調ぶる時は、すら〳〵と聞えて、且つは感ずるまでにも及ぶ事に候。總て御歌あら〳〵しく、常語よりつやけき物多く、强ひて云はゞ、思ひ付き次れ、調子といふもの、大體だけは會得するのである。

併し先後の區別は、我々作歌には門外漢であつた時代の事で、一旦作歌を始めると、作る事と讀む事とは、兩々相待つて行つて、互に助け合つて行くのである。決して其一方に偏する事は出來ない。

調子を呑み込む爲めの讀詩に於いては、我々廣く讀むといふ事よりも、成るべく狹く讀んで、そして其物に徹底するやうに心掛けた方が利益である。

智識を得るのを目的にして居るならば、我々成るべく廣く讀むといふ必要がある。併し調子の會得には、多くの物は必要がない、優れた少數の物を讀んで、其呼吸を良く呑み込めば、其れで目的は果される。其方が勞れ少なくて、效果が多い。

如何なる少數の物を撰ぶべきかといふ事が、次いで問題と成つて來る。此れに就いては我々は、自分の好きな歌を撰ぶのが一番利益であると信じる。

調子は前に云つた通り、自分の感情の調子を發見する事である。其點から見て、自分の好きな歌といふのは、自分の感情により多く似たものと云ふ事である。さういふ作に依れば、我々は他の作によるよりも、調子を會得するといふ上に於いて、比較的容易である。

夙に我々は、歌集を讀むに當つて、必ず音讀する事を必要とする。

散文であると、智識に訴へる部分が多いので、我々は其意味を頭腦に入れる上に就いて、成るべく邪魔をしないやうにしなくてはならない、即ち默讀して、理解の上に拂ふ注意を、讀み方の方へ割かないやうになる必要がある。併し韻文のやうな、理解といふよりも感情を以て味ふ事を主として居る物にあつては、靜かに音讀して見て、初めて其味が味へるのである。即ち味ふ方法として音讀を廢し

第、口から出任せにすと云ふやうに聞き成され侍り。歌は思ふ儘なば述ぶる物に侍れど、有りの儘を云ふ物にはあらず。又我言に、歌はことわる物にあらず、調ぶる物なりと申候。調と申すは音調の事にて、さるは、麗はしく、うづ高くある事にて、假りにも賤しき調を交へぬが、此道の稽古に候よし承り候。されば一首の上も、精心を入れて、麗はしく調べ立ては成らない。

音讀する上で注意すべきは、我々音讀をすると、思はず調子に乘せられてしまつて、意味の方は二の次とし、唯調子の面白みにだけ曳かれて行くやうな事が起る。此れは避けなくては成らない、其れで無いと、折角音讀をして見る意味までも失つてしまふ事に成る。

好きな作を讀め、音讀をして見ろと言ふのも、要するに調子を會得する上に於いて便利な爲めである。で我々は、讀みつゝ同時に其言葉が持つて居る意味を味つて見て、一句々々言葉と共に描き出される姿に注意しなくてはならない。如何に言葉が用ゐられて、如何に感情が現はれて來るのかといふ點に注意して、其双互の關係を好く會得しやうと努めるのである。

斯ういふ方法に於いて、我々或る好きな歌人の作が、如何なる調子によつて成されて居るかといふ事を會得すると、其れが直ちに自分の作をする上の手心と成つて來る。利益を受ける所が多い。

既に自分の調子といふものが多少分つて來たならば、改めて廣く讀み、多く讀んで、自分の調子といふものを豐富にしやうと心掛けなくては成らない。此れは言ふまでも無い事である。

つる事に候。うづ高く麗はしきは、即ち天地の心にて、やがて、天地の調也。此調を得たるをよき歌とす。所謂よこしま無き性情の聲にて、眞の調なり。此誠心の麗はしき事は、「新學異見」にもほゞ申し說き侍りしが、天地の聲なる故に、あめつち感ずるにたやすく、眞心の調なるが故に、おに神の哀感深し。されば詞に出任せを咄すものにあらず、思ふ心の儘

四、言葉の調子

言葉と感情——情の歌——陷りやすき弊——才の歌

調子といふのは、感情その物に屬したもので、言葉にあるものでは無い。ちよつと見ると、調子は言葉にあるやうに感じられるが、其調子ある言葉といふのは、既に感情を言葉に傳へた、その言葉の持つてゐるもので、感情を離れて、言葉それ自らに、調子といふものがあるのでは無い。——此事は前に一わたり言つた。此れは餘程注意しなければ成らない事で、我々はともすると、此本末輕重を誤

を云ふ物に侍り。何れ麗はしからざれば、愛づるに足らざれば、人神共に如何で感ずべき。唯麗はしく綺麗に仕立て給ふべし。世にも取り遂へ多く、鉢巻にて股引姿を、飾りなき眞心の調など思ふも侍るべし。唯束帶して立てるが如きを願ふべし。さらぬは雲の上にて歌ふとも取るべきならず。歌に限らず何の道にも、殷しきなば厭ふ由承り侍り。されば一首の上にも力を入れて、眞心の調を整へ給ふべし。下地器用なる口振りに候へば、少し心を得給はば、立ちどころに青雲を凌ぐべし。あなかしこ。

▲信濃人西郷元命が詠草の奥に

兎角異樣なる處侍り。只すら〳〵とみやびなるがよし。異やうなるを嫌ふと云へど、又子供のあと先合はぬ世話するやりたがる。

初めて歌を作る時には、我々は本氣でする。佳い作をしやうなどといふ、大した野心は持たないで、一意、言はうと思ふ事を言つて見たいと努める。此まじり氣のない、突きつめた心で懸ると、不思議に感じも纏まる。感じの調子といふものも捉へられる。ともすると、不似合に佳い作の出來る事がある。子供で佳い作をしたとか、無學で、此れと言つて知つてる事も無い者が、優れた歌を作つたといふ例は、往々聞く事がある。大方、斯ういふ調子で出來るのだらうと思ふ。

所が、多少作をした手心があると、我々は調子附いて來る。歌なんて何でも無い、幾らでも出來るものだと、高を括つて懸らうとする。實際、調子が附いて來ると、數の上から言ふと、可なりの數まで一息に出來るものであるらしい。所が、さういふ調子で出來る歌は、不思議に惡い。作つた時には得意でも、後から見ると拙い。最初賞めてくれた人も、今度は賞めなくなる。——斯ういふ順序を踏むのが、先づ普通の者の行き道らしい。

さういふ際の歌は、何所が惡いだらう。

多くの場合、さういふ時の歌は、上すべりがしてゐる。一わたり讀んで見た所では、不束な、覺束ない所は脱してしまつてゐるが、其代り、惡達者に成つてゐて、口まめに、ぺラ〳〵と饒舌つたといふ趣がある。言へては居るが、言へてゐるといふだけ、本氣な所が無い。沁み〴〵とした面白みが無い。惡くも無いが、善くも無い。手を入れて直さうにも、直す所の無いといふ作となりがちだ。此點から見ると、初心な、本氣の歌の方が、結句ましだといふ事に成る。

此れは、言葉の調子を呑み込んで、其調子で歌つてゐるからだ。

うなるもしどけなし。歌は幼なかれ、と古人の云へるは、専ら心ばえの事也。幼なめきたる眞似せんは、中々なり。幼きを願ふは、眞心を述ぶるを云ふ、唯思ふ儘を述べよとなり。其思ふ語は、如何に學ぶと云ふに、唯一筋に、此誠實を述ぶるのみ。誠實を述ぶる所、即ち幼き心に叶ふなり。態と幼なめくに、厭味ありて、いよ〳〵誠を離るゝわざなり。返す〳〵幼なめくは惡しき事なり。御歌に折節其振り見ゆれば申侍るなり。もと幼なかれと云ふは、後嵯法師の語なり。申し過ぐる所侍る故に、是れに、却りて惑ふ人少なからず。歌の心は幼き物と云ふべし。幼なかれは下知する下心ありて、かの似する方に落つめり。彼れの調を捨てゝ見るべき事なり。唯眞心を述ぶると云ふにて足れるなり。巧にせんと感情の調子を出すといふ事を忘れて、言葉に調子さへあれば。それで十分なやうに誤解してしまふのだ。此れが重なる原因を成してゐる。斯ういふ際の歌は、我々がよく、才の歌——才ばかりを頼りにして作つてゐるので、情が伴つてゐない——と評す物である。

何時までも、此才の境、言葉の調子で作る境、歌といふ形式を頼みにして、此形式に箝るやうに作をしてゐる者も少くは無い。併し、感情の上で眞實のある者は、此れだけでは滿足してゐられない。もう一層適切な、自分の胸へ中る作をしやうとする。さう成ると、俄に行きつまつたやうな氣がして、歌が出來なく成る。其れぎり厭に成つてしまふ者もある。努力して、今一息進んで行く者には、新たな境が直く開ける。——本通りに歸つて、其前の道を踏み直して、靜かに、自分の感情の調子を歌はうとす。其謙遜な態度の中に、作歌の面白みの盡きざるものも發見して來る。

五、囚はれやすき調子

優美——先入主——僞らざる僞——感情の改造——調子の野

優美といふ事は、不思議な位我々に解りやすい。自然の景色に對つても、人事の上でも、優しい、小さい、細い、泌み〴〵したといふやうな美は、妙に囚へやすい。そして、此優美といふものは、作とするにも容易であるし、讀む方も動かされやすい。つまり、最も入りやすい趣味である。昔の歌集を見ても、物語を見ても、一番多くの部分を占めてゐるのは、此優美といふ趣味であるのを見ても、其れ如何に萬人に通有な趣味であるかゞ思はれる。誰しも、文藝といふものゝ趣味を解するのは、此門から入つて行くので、文藝といふものは、優美なる趣味に限られたやうにも解してしまふ。所が、此所に一つの問題がある。我々の趣味としての優美、我々

も、幼なくせんとも思はゞが善きなり。常の言語に、さる心遣ひなきをもて知るべし。

猶ほ少しにても訝しき節々は、打返し〳〵又の傳手に問ひ越し給ふべし。歌の稽古にて侍るなり。歌に師弟と申す事、近き世まで更になき事にて侍りき。唯よき方に隨ふのみ。己が思ひを、己か言葉もて云ふに、何の學ぶ事か侍らん。あなかしこ。

▲信濃人矢島保恭が詠草の奥に

今少し心を用ひ給はば、頓て開悟の時侍るべし。開悟と云へばとて、禪家の悟りなどの如く、靜坐して待つにも侍らず、唯詠みもて來る程に、平語と一つに成り侍るのみ也。常云ふ詞の、斯く云はゞ聞えん、と云はゞ聞えざらんなど、つゆ心をば用ひ侍られ

の感情の要求してゐる優美であれば、其れは確かに。大事なものだ。重立つたものだ。其意味の優美ならば、幾らあつても妨げない。否、動かす事の出來ない根本のものだ。併し、作歌をする上で、此優美といふものを重じるのは、多少他の眞味がある。それは、優美といふ事は、趣味その物の爲めに歌ふのでは無い。歌ひ易いから歌ふのだといふ傾向がある。此れは。我々が陷りやすい事で、知らず識らず本末を誤つてしまふ。

我々自分の持つてる物は、値があるやうに見えたがる。自惚れる積りも無くて自惚れてしまひたがる。此れは自然の勢ひらしい。既に優美といふ趣味が解しられやすく、そして、其れが一旦手に入ると、此ればかりが無暗に有難い。過重してしまふ。一から十まで優美で無くては成らないやうに思つて來る。優美なもの、優美な調子をと覗ふ。さう成つて來ると、自然も人事も、優美な方面ばかり見える。他のものがあつて、其れが自分を動かしても、成るべく眼を閉ぢて見まいとする。優美なものばかりが歌の境のやうに思ふのは此時だ。

其所で、更に此感情を幇助するものがある。外から來て保證してくれる者がある。それは、昔の歌を見ると、如何にも優美だ。優美一點張りだ。そして、此方面に於て、其美を十分に發揮してゐる。歌とは斯ういふものだと、思ふとも無く思つてしまふ。

此樣な調子で、我々は優美に囚へられる。優美な調子を以て、歌の標準のやうにする。そして其れに馴れて、溺れて行つてしまふ。

我々は、餘りにも優美な歌の多いのに苦しむ。優美の尊いのは知つてゐる。其面白みも解する。併し優美一點張りに成つてしまふと、我々は其單調に堪へない。そして、作者は果して斯うまでも、優美な事ばかり感じてゐるのだらうかと疑つて來る。物足りないの

ど、終日語らふに、調のたがひなく、てにはの狂ひ侍らねは、有る事を有り、無き事を無しと云へばなり。彼の平語の中にも、聊か欺偽の意侍れば、忽ち調しどろにて、人の笑ひに御ゝ知らるゝ也。此れ實を離るゝや否、てにをはも調も、異はざる事能はざるものなり。歌人のてにをは調の亂るるも、皆己を欺き、人に街ふの心よりなる事を知り給ふべし。

である。

作者は偽りを歌ふ氣では無いに相違ない。感じて歌つてゐるのだと思ふ。が、其偽らず、感じてゐるといふ中に、既に偽りがあるのだ。優美以外なるのは、感じても歌はず、唯此方面ばかりを歌つてゐると思へる。平安朝時代、朝廷の中に無聊に苦んでゐた貴族ならば、其れは優美以外には何も感じなかつたに相違ない。現代のやうな社會に住んでゐ、現代の空氣を吸つてゐ、殊に多感な青年として生きてゐる以上、其胸に湧れ來る感じの、唯優美ばかりでは無いに定つてゐる。生きた、力のある感情で、他に歌はれずにゐる物が、澤山ある事を思ふ。

優美な感情を、それに適した優美な調子で歌ふ、此れは其れで立派なものだ。歌は斯う無くては成らないといふ標準は無い、如何なる方面でも、其れが徹してさへ居れば十分だ。所が、此優美な調子されば、歌の調の整ねは、實地に入らざるの一つのみ。今にても、小兒の詠には、調の亂れたるを見侍らず。こは他なし、名利の心を未だ知らざる故なり。かの實地にさへ入り侍れば、おのづから、彼の飾れるが如く、巧めるが如きの佳境、學ひ侍るべし。この道の本地の風光は、此ればかりの事に侍り。たやすからずや。

にばかり拘んだ結果、其手心によつて、他の趣味までも歌はうとする事が起る。

優美な趣味を歌つてゐた間は、立派な作が出來た。所が、趣味が變つて、單に優美ばかりでは滿足しない。優美に見える形、優美に見える事柄以外にも、感じて歌はうと思ふ事が起る。その方が多く成つた。其れにも關らず、以前通りの手心で歌はうとする。以前に得た形式で、押通さうとする。意識してするのでは無いが、自然の勢ひとして、さう成つて行く。

此所で我々は何うするであらう。

多くの場合、我々は感情を改造する。優美な、歌ひやすい、且つ自分に馴れた方面へ引きつけて置いて、其上で歌はうとするのだ。それで、出來上つたものはと言ふと、形式は立派に行つて居る、整つて居る。詩想も不束では無い。だが、何所か拵へた跡がある。持

▲木曾人小坂道賢が詠草の奥に

目をせゝるやうにては歌にはあらず。歌は平語よりも優に伸びやかなるをもて歌と申す也。然るを、譯を云ひ立つる事と心得るより、思ふ事、三十一字に云ひて終はればならず。文字は足らず詠む所なく、平語より忙しく足らはぬ物になり、早口のやうに成りて、終に調もなく、理もなき事に成るなり。頭に枕を置き、末になりけりなる哉、と云へば、歌なりと心得るは、詠み習ひのわざにて、甚だ拙し。「玉にもぬける春の柳か」と、末の足らぬのは、一首を延ばへて歌にせん爲めなり。古人、若菜と云へば春日野、鹿と云へば小倉山、月といへば音羽山、更科など、しつこく云はるゝなば、初心の心には、珍らかなる所何程もあるに、つて回つて居る。無理に押し込んだ趣かある。つまり生氣が無い。面白くて宜い筈であつて、其實面白く無い。——かういふ例は幾らもある。我々は少なからず見もし、自身でも經驗する所である。

一度拵へた形式上の手心といふ殼、此れが脱げ無いのだ、內容は變つて居るが、殼だけは前の物で行かうとする。其所に無理がある。調子に束縛されて、感情を改造するといふ所へ落ちて行つてしまつたのである。

六、五七と七五

萬集と古今——二つの色合ひ——七五の優美

我々が優美な調子に囚へられて、終ひには感情その物までも欺くと言つたが、此優美といふ事を思ふと共に、我々は其れを生み出した重なる原因とも思はれる、所謂七五の調子なる物に就いて、瞥見して見やうと思ふ。

短歌の調子には、七五と五七とがある。固より其れ以外な物もあり、又其れが漸次變宮に成つて行く傾向を持つて居るが、大體の上から見ると、此二つが重なる調子である事が思へる。

其れで今、此二つを比較して見やう。

所謂「調べ」といふものに就ては、先輩は力を籠めて研究してゐる。其結果を發表したものも少くは無い。然し此所では、さういふ方面の紹介は止めて、唯思ひ附くまゝの僅かの事を言ふに止める。

從來の短歌のやうに、個人性の入る事の極めて少ないものにあつては、其調子も、時代によつて區別される。誰の調子といふよりも、何時代の調子といふ事で區別が出來る。

調子の上で、際やかな區別のあるのは、萬葉集、及び其れ以前の

おぞき事と思ふは却りておぞきにて、調なければ歌にあらずといふ事が、合點行かぬ故なり。春日野は若菜のよく萠ゆる所、更科は月の格別なる所といふのみにあらず、その所の名、自然調のあれば、止むを得ずして此れによるなり。住吉・夜の中山など、たゞの名ならんや。況んや、てにをはなど、わが自由自在になる物なれば、十分優美になくて歌と、古今集、及び其れ以後との間に横はつて居るものである。萬葉集は奈良朝のもの、古今集は平安朝のもの、時代の上から言ふと、相接して居るのであるが、不思議にも、截然として區別がある。

萬葉集の歌を見ると、中には多少の例外はあるが、殆ど其全部、五七、五七七、といふ調子である。即ち、五七が土臺に成つて、其れを二つ繰り返し、最後に七を添へたものと見られる。即ち

御民われ生けるしるしあり大君の榮ゆる御代に逢へらく思へば

大君は神にしませば天雲の雷の上に庵せるかも

田子の浦ゆ打出でゝ見れば眞白にぞ富士の高嶺に雪は降りつゝ

といふ類である。

其れが、轉じて古今集になると、五七五、七七、といふ調子に成つてゐる。此れを讀んで見ると、七五といふものが、調子の土臺には、歌を詠むといふ證の立たぬ事なり。「芽も春めきし下水」など、歌の續けともなく候。下水ならば、何の下水と續かでは叶はず。「春の日の日よりよければ庭もせに掻きひろげたる去年の白雪」など、一句も歌は無く候。身は賤しけれど、天地の調なれば、萬乘の君に聞え上げても、恥づる事なきをもて、歌よむ人と云へば、歌を知るも知らぬもあがめ尊とぶ成つてゐるのを思ふ。例へば、

春日野の若紫のすり衣しのぶの亂れかぎり知られず

いとせめて戀しき時はぬば玉の夜の衣をかへしてぞ寢る

人はいざ心も知らず故里は花ぞ昔の香に匂ひぬる

といふ類である。

素より此區別は、大體の上から見たもので、嚴密に何れも然うだとは言はれない。俳し萬葉の歌人は、餘程この五七の調子が、自分の感情に適切であつたと見え、思想の上から、丁度に五七に成つて行かない場合には、かの意味の無い、唯言葉の上の調子にのみ用ゐる枕詞まで入れて、此五七の調子を取らうとする。一方、古今の歌人によつて初められた七五の調子は、その後益々發達して、終ひには、五七五だけを上の句、七七の方を下の句と言つて、立派に二つに別けてしまふまでに成つた。俳句が、此上の句を土臺にして起つ

たとか、又歌人が、七五の調子を取らうとする結果、おのづから第一句目の五音が獨立したがる傾向を持つて來て、初五は据ゑ難いものだといふやうな事を言ふやうにまで成つた。

何故さういふ際やかな變遷があつたか。此れに就ては、先輩が樣樣に論じてゐる。が、其れは別として、此二つの調子を讀んで見ると、五七の方は重い、どつしりと、落ちついた調子だ。或は重くろしく、變化に乏しい。五七に較べると、七五の方は輕い。柔かに、囀くやうな所がある。容易に移つて行く、といふ趣がある。

今一つ、我々の心に留る所は、五七の調子は、何所かに口語に似通つた節がある。試みに口語を、調子ある言葉に移して見やうとすると、七五に較べて、五七の方は、割合に容易に移せるといふ趣がある。七五の方は、口語といふよりは、何うしても唄ひ物といふ趣を多く含んでゐる。

なり。よく整へて、聞きの賤じからぬやうにするを、調ぶると申すなり。理りなくて調のあるは、理りのなき歌なり、少しも歌といふ名は恥づる事なし。今の樂のやうなものなり。ことわり立たば、理りのある歌にて、最上の事なり。此うらにて、何程おもしろき理りありても、調なければ歌にては無きなり。歌といふは調の名にて、理りの名にては無きが故なり。餘り長くなり恐入り候。とくと御聞分け祈り候也。常の人には申さず、貴下故に申入れ候事也。誰も皆此境を知らぬを、獨り知る工夫第一に御座候。

御歌の姿、つら〳〵見るに、今一力入るれば如何にも成るべきを、物むづかしさに、ざつとなぐりてと申すやうなるけはひ見うけ候。景樹に點を乞ひ給ふ歌なれば、さら〳〵さる事有るまじく、調べの

大體、かういふやうな色合を持つてゐるので、五七の方は、勢ひ、内容に重きが置かれる。一つの感情を、餘り磨きをかけず、荒削りのまゝで其所へ出したといふやうな所がある。七五の方は、形式に重きが附く。形式の方が面白く、自ら調子が附いて、思想の方は二の次に成りやすい傾がある。

此五七の調子は、萬葉集に限られて、其後の時代には及はなかつた。古今集以後は、一に七五に限られてしまつて、たま〳〵、此五七の調子を復活させやうとする者があつても、多くは好古の趣味から試みたのみで、何所までも五七として持つてゐる特長を發揮させやうとしたのでは無いらしい。若し五七が、彼の七五と並び存するだけの勢力があつたならば、我短歌の歴史は、今少しく内容に重きを置くといふ傾向を持つて、現在我々が持つよりも、遙かに變化のある、且つ豐富なものだつたらうと思へる。

上にも調べかへして、且つ詠み捨て給ひし中にも、善しと心に入りたるを、拔き出て記し給ひけん事論なかるべく候へども、打見には、兎角やり捨てのやうに相見え候。いと〳〵訝しき限りに御座候。是れは、道を大切に思ひ給はざるのなす所也。御心つけられて詠みしめ給はば、一時に直り申すべく候。昔の御歌は斯樣には無かりし也。ゆめ〳〵省み給ふ事に候。道は私の道にあらず、天下の道也。人にも敎へ候、人のもてそこなひ候へば、大いなる罪を得る事に候。五條三位の、老いて後念佛せんとし給ひしを、汝、歌を詠むにあらずやと神託ありしも、返す〳〵も、僞りなき誠心を練り出すが故也。そら念佛に較ぶべくもあらぬ事、もとよりの事なりかし。其れを、なぐり詠みにし、或は名利の爲めに人に

古今集以後は、調子と言へば、專ら七五に限られた。そして七五としての美を、何所までも發揮して行つた。輕く、柔かな、囁くやうな調子——優美といふ事をのみ旨とした調子が、短歌の全體を蔽つてゐた。その結果、思想の方は、自ら制限されてしまつて、此調子で歌へるものばかりを歌ひ、其他は、短歌の領分では無いやうに扱はれてゐた。

内容は單調だ。歌ふべき事が定まつてゐる。其れ以外へは、調子が出る事を許さない。此所に於いて、内容といふ事は閑却されて、工夫を凝らす所、爭ふ所、一に、此七五の調子の上のみにある。代代の秀才が、其生涯を捧げて、此調子の美を發揮する上に努力したと言つても過言では無い位である。

かういふ順序で、短歌は唯優美といふ方面にばかり進み、終に現在見る如き歷史を織つてしまつたのである。そして此歷史が、間接

直接に我々の上にかぶさつて來て、其れを離れるだけが、既に多大の勇氣を要する如き有樣となつて居るのである。

七、詩語

詩語の制限——優美なる歌詞——詩語と文語——自滅の一因

七五の調子に限られた爲めに、優美といふ趣味にばかり限られて來る、優美の趣味に限られたる爲め、詩語も同時に優美でなくては收まらないといふ制限が附いて來る。此れは自然の順序である。

詩語の制限といふ物が、如何に短歌の發達を害したかは、恐らく我々の想像以外であらう。

短歌の上には歌詞といふ物がある。此れは其全部、曾て古人によつて用ゐられた事のある言葉で、歷史といふ後景を持つて居る言葉である。そして歌人は此歌詞によつてのみ歌ひ、其以外に出るのを

以て罪惡のやうに思つて居る。

此歌詞が如何なる性質のものであるかといふに、一に優美といふ標準によつて撰擇されたものである。一つの例を取つて見ると、短歌の上では名所といふ物を重じる——歌人は居ながらにして名所を知るなどゝ言つて、其れを一つの誇りともして居る位だ。所が、其名所が何ういふ所かといふに、必ずしも風景の優れた所ではない、曾て古人によつて歌の中に詠み込まれた所といふに過ぎない。其れならば、古人の佳什を殘した所は、必ず名所になつて居るかといふに、此れは然うでも無い。地名でも語呂の惡い地名は生存の價値なきものゝやうに棄てられてしまひ、語呂の良いものだけが名所の權利を保つて居るのである。

歌詞が如何なるものであるかは、此一事によつても知られる。

此歌詞なるものは、古今集を土臺として起つて來てゐる。そして

留ふなど、あるまじき事は云ふも更なり、やがて却つて罪業の緣となるべき事、畏こむべきにや。さればこたびの御詠草は、其心を用ゐてものし置き侍れば、ひそかに其工風第一に候。あなかしこ。

▲信濃人藤本光好が詠草に

「ひがめとは思ひながらも紫の雲の色なす岸の藤浪」

紫の雲の色なす云云、美しき言葉なり。さるに初五に、ひがめなど、打ちつけたりとも見え侍らず。此れを調をいたはらぬと申すなり。さりとて、ひがめなど、云はれぬ言葉など云ふにはあらず、かけ合ひを吟すべしと云ふなり。「打渡す遠山ぎしの紫の雲の色なす藤なみの花」などやうに有りたし。是れもよしと云ふにはあらず、唯歌の樣を申す也。歌は

上に言ふ如き感情の中に包まれて、何の變化も無く生まれたまゝの有樣を保つて居る。其如何に變化の無いかといふ事を、試みに散文の方と對させて見たまへ。

古今集は平安朝のものである。散文の方で同時の物を求めると、源氏物語、枕草紙を中心とした、現在から見ると、既に古典として、特別の研究をしなくては解し難いまでに成つてゐる物である。

源氏物語は、其當時にあつては標準の文章であつて、あれで萬事が足りた。しかし時代は變化に變化を重ね、人心の要求もそれに伴つて變じて來た。源氏と同じ小說といふ上でも、太平記、源平盛衰記などの軍記ともなつた。近松、西鶴ともなつた。馬琴ともなつた、三馬一九ともなつた。轉じて現代の口語體の小說とも成つた。

此等際立つた變化も、變化させやうとしての變化では無い、人心の要求に應じて當然に起つた所の變化である。源氏を高閣に束ね

姿のみにて、哀れにも、惜くさげにも聞ゆるなり、更に趣向によるものにあらず。趣向は唯有りの儘なり。理窟の爲めに姿を痛めん事、更にあるまじきなり。詞書、長歌などは、長き間に紛れ行きて、調惡しきも目立たぬ方も侍れど、短歌は誠に正當なる物なり。紛らはすとて、直すゆとりなき故なり。よりて長歌詞書など善くする人の、歌は手づゝなるが多きなり。歌よく詠む人の、詞書、長歌の拙きといふは、あらぬ事なり。世にさる人もありと見ゆるは、歌のよからぬなり。歌と云ふ物の調を知らで、歌をよく詠むと思ひそこなひたるなり。今、古學者と唱ふる人の、文に誇りたるは、文を知らざるなり。誠の文と云ふ物にあらず、大に論あり。

菊花盛久

「咲きしより幾日をませの白菊ぞ霜を

て、口語體の小說を讀むといふのも、自然にして到つたのである。さういふ變化の中に立つて、文語に對して居る詩語はといふと、源氏と比較すべき所の古今集である。それより一歩も動かない。之れを文章から言ふと、現代の總ての物を源氏式に書かうとするのである。

歌詞では我々の思つて居る事が言ひ表せない、複雜した感情、新たなる感情は、從來の言葉だけでは出ない。しかし一方では言はなくては成らないといふ要求がある。斯うなると、進んでも不自由なる型を破るか、又は退いて感情を言葉の程度まで引き下げるか、二者一を撰ばなくてはならない。

舊派の歌人が如何に現代の感情とは相關せざる如き樣を裝つて居るのは此爲めであらう。如何に保守的な感情を持つて居ても、苟くも現代に生活して居る以上、平安朝時代さながらの、感情で、日々を送つてゐる筈は無い、言ひたいと思ふ實感も少くは無いだらう。其れが少しも言はれずに居るのは、要するに言ふべき言葉が無いからである。汽車を歌はんとして「むしけ車」といふ言葉を造り出すのを見ても、其心の中は察しられる。

優美に囚はれたのは、無意識にさうなつて居る所があるが、詩語に囚はれて居るのは、有意識である、一層に重い。

舊派の短歌の自滅せんとする傾向を持つて居るのは、此詩語の煩ひである。少くとも其一半は、繫つて此詩語の上にあると思へる。

八、新しき調子

・本然の調子――型の破壞――其先輩

短歌の調子は、今は何等の型も無い、其人の感情が要求するまゝに、各々獨自の調子を作つて居る。我々が、前に繰返し言つたやう

ば色の增すものにして」

此頃など、さも豐かに詠みなすべきなり。古歌に、「我宿の菊の白露けふごとに幾よつもりて淵となるらん」など、吟ずるに命も延ぶる心地し侍り。幾日をませの白菊ぞなど、命も縮む心地し侍り。調を成さゞる故なり。調といふもの、こたびの古今序にもあらあら侍り。併し、ゆら〳〵としたるが調の整へるにあらず。

に、情緒そのまゝを現はしたと思へる調子を持つて居る。

此新調を立てるといふ事は、やがて舊い調子を破壞する事であつた。新たなる物を立てるよりも、先づ全力を擧げて其心の中から舊い調子を棄てた。そして新たなる調子の生まれ來るのを待つたのである。

最も際やかに、且つ眼ざましく新調を試みて、當時の歌壇と全然立ち離れた趣を持つてゐたのは、與謝野氏である。氏の第一の集「東西南北」の如き、盛に當時の青年に愛誦された。續いて出た「天地玄黃」も、其聲價を落さなかつた。續いて、三集四集と出るに隨つて、青年の短歌に對する神經は、刺戟され、鋭敏と成つて來た。短歌にも、斯ういふものがあるか、斯ういふ新調があるかと、驚いたのだ。

妙義の山太古のゐのわれを笑ふ飛ぶに翅なし小さき男の子

忙しき事は忙しく、強き物にはさも強きが、調の整へるといふなり。俗にも觀辭は勇みて云ひ、弔辭は萎れて云ふにあらずや。これ天地自然の事にて、敎へを待たぬ事なり。そこなどの詠み給ふは、打笑ひて悲しやと云ひ、泣聲して、あなゑでたやと云ふにて、更にあるまじく、物狂ひの語官といふべし。これ又、そこ邊のみならず、世の中大方然るは恐

此れは、氏が當時の作の一つである。此れを舊派の歌人の作に較べて見ると、其新しい點に於いて、殆ど同時代のものでは無いやうな趣があつた。

從來の調子を打破するといふ上では、氏の働きは實に遺憾なきまでゞあつた。固陋な、執拗な、從來の歌人から嘲笑される、攻擊される、其れに打勝つて、氏の新聲の價値を認めさせるまでには、相應な時日を要した。又一方、短歌といふものを閑却して居た、新代の青年に、短歌としての價値を感ぜしめるにも、矢張り相應の時日を要した。此方は、彼方に較べると、比較的効果が收めやすかつたやうだ。

併し、氏の新調には、まだ多少の古い匂ひがあつた。如何に打棄てやうとても、古典の趣は纏はひ付いて居て、離れ切らない。それに又、支那文學から影響されて居ると見える趣味も、可なりまで

しからずや。唯誠實の至らぬが致す所なり。誠は萬道の基本なり。こゝにはづれては、歌の整はねばかりにあらず、恐るべし。斯樣に申し續け侍れば、如何にも〳〵むづかしく思ひ給ふらむ。更に然らず。唯一つの心得まで直り侍る事なり。又己れ、人には斯く申し侍れど、我が詠むは誠に淺ましき事のみに侍り。世の中、親の子を誹むるを見るに、己が若き時の過ちは脇になして、うべ〳〵しう聖り立ちて、誠に然るべう申すに等し。此れ又、更に己が非を隱すにあらず、其誹むる時に用なければなり。又誹むる時は、其主や親も、實に賢者の心なり。さる例しに引き較べて、嘲り給ふべからず。此歌の道、年久しくたがひ來れるより、外の道にも及びて、淺ましく違ひたる事少なからず。されば劣き事業に侍らあつた。此れを歴史的に見ると、其新しい事は言ふまでも無いが、讀者の感情から言ふと、まだ其所に餘地があるやうに感じられる。

從前の歴史から全然離れて、此所に新たに生れて出でたやうな新調を試みたのは、與謝野夫人の第一の集、「みだれ髪」であつた。

夜の帷にさゝめき盡きし星の今を下界の人の鬢のほつれよ

此れが、「みだれ髪」の開卷第一にある歌である。此集に對しては、毀譽の聲が隨分に高かつた。譽める者は、從來の歌集には見られなかつた新味があると言ふ、解らぬながらに面白いと言ふ。毀る者は、一に、其難解の點から言ふ。そして、其中には、立派な評家も混つて居る。そして、此難解といふ點に於ては、新味を賞する者も、讀者の無智といふ事を非難しながらも、多少當惑の色の無かつたでは無い。

要するに、「みだれ髪」に對する毀譽は、其大部分は、新しい調子といふ點にあつた。其内容に就いて兎や角言ふのでは無くて、調子の新しいのに對し、各自の感じる事を言つて居たといふ趣がある。僅か距てた現在の讀書界では、此歌に就いて、難解だと言ふ者は無い。よしさう思ふ者があつても、罪を自分に歸して、解釋を求めやうとする。其れが其當時にあつては、立派な評家までが、一に其點から非難した。

實際、夫人の創めた調子は、短歌壇に於いて、所謂「調べ」といふものから脱却し、情緒の持つて居る調子を、さながらに歌ひ出す、其れを以て調子とするといふ事は、實に夫人に創つたと言つても過言では無い。

或る人が斯ういふ事を言つた。短歌では、一つの中心を、動かないやうに云い据ゑるといふ事に就いて、誰しも多大の苦勞をして居る。其中心が却々据わらない。それで、過ちの無いやうにと、いた

す。已れ身の程をも憚らず、人の上まで云ひのゝしるは此れが爲めなり。其わたり、賀川勝巳、宮越宿なる都筑杏容など、去年來寄宿のうち、愚案の書、新學考と申す物を寫し取りて歸りたり。そこ迄へも見せ參らせよと申し侍りしかば、定めてとく見給ひけん。其れにも初草の所など、專ら調にかゝる事也。此度の正筏序など引合せて、勘考あるべし。若し

はり〳〵歌ふ。千篇一律といふ事は、此態度の中から出て來る。然るに、夫人の作を見ると、勝手な所に中心がある。或は中心の無いものもある。其れで居て、不思議に感じを傳へて居る。言はゞ、法度が無くて、俳も法度のある物に優る効果を持つて居る。此點から見て彼は正しく天才だと言つた事を記憶して居る。

九、現在の調子

散文と韻文の調子——文語と詩語

現在の短歌を讀んで、其調子といふものに留意すると、我々は第一に、散文の調子と、短歌の調子と、著しく接近して來て居るのを思ふ。

以前の短歌を見ると、我々は短歌には特に一つの懸け離れた調子のあるのを思つた。散文とは根本から言ひ表はしを異にした、短歌

新學考いまだ御手に入り侍らずば、寫させて參らすべし。彼兩士に遣したる料銀一兩かと覺え侍り。江戸より印刻に上げ度き由申し來り侍れど、未だしかと許し侍らず。すべて委しくは、追々何ぞ見出し置きて參らすべし。又調よき歌を一二首書き付けよとの事、承り侍れど、彼の調は一首々々にてよしあしある事に侍れば、申し難し。古今集など皆調とゝの

式とも言ふべきものがあつた。然るに現在のものを見ると、全く散文と同じ立場に立つて居る。率直に言つて、持つて回つたやうな言ひ方はしない。平明に言つて、いたはり〳〵言ふやうにもしない。一意、讀者の胸に直接に、切實に感じさせやうとして居る如き趣がある。即ち散文を書くと同じ心持を持つてして居ると思はれる。唯詩材が異るので、自ら其言ひ表はしの上に多少の色合の差があるといふに過ぎ無い。

口語を土臺として、言はんと思ふまゝに直截に言ふ、我が情緒との關係は思ふが、他には何等の拘束する物も認めない、そして行かんとする所まで獨り往く、——斯ういふ意氣込みが、全體に通じて感じられる。

調子が既に斯ういふ風であるから、隨つて詩語も極めて自在と成つて來て居る、文語の殘らずを取り込む事は出來ないまでも、文語

の中、意味と聲調と相共に優れたもの、即ち文語の粹は殘らず取らうとして居る。更に進んで、文語としては取りかねるやうな古語も、其優れてゐるものは幾らでも取り入れやうとする。現在は漢語も俗語も洋語も、又何時の時代の物も、必要に應じて取り入れて、之れを詩化しやうとして居るのである。

其調子に於いて、其語彙に於いて、現在の短歌が如何に從來のものとは異つて居るか、如何に豐富に成つて居るかは、例を擧げて語るまでも無い、試みに一つの歌集を取つて見れば、其れが總て例と成つて居る。

新人には新衣が要る、其新衣は自らの身に合ふものを撰んで、自ら裁つべきである。かういふ權利は、短歌を作らうとする者の誰にでも一樣に與へられて居る所である。

へる歌にて侍り。御熟考あるべし。新古今など、皆調たかひたるのみに侍り。此れ亦御勘考あるべし。例へて云はゞ、古今は自然の花なり、新古今は、枝を挽め葉をすかしたる花なり。萬葉集は細工花なり。此三集に限られど、大體是れにて、其時代々々知り給ふべし。一首一首御疑ひあらば、書き拔きて御尋れあるべし。申し進すべし。

▲信濃人白木重樹が詠草の奥に

すべて御歌の心聞えかれ侍り。何分聞えずしては役に立ち難き事なり。如何に麗はしき事にても、其譯聞えずしては、誠に云はゐも同じ事に侍るべし。今日の心を云ふに、聞えゐと申す事は無き事なり。よく〳〵御返り見御勘考あるべし。歌といふ事を、詠むといふ

第七編

一、自己の歌

二物を要せず——特色——自己の面目——新文藝

我々は今、短歌を作る上に於いての態度といふものに就いて考へて置きたいと思ふ。此態度の如何は、最も根本的のもので、此れさへ固く定まつて居るならば、其人の材能に隨つて相應の進歩は期して待たれる譯である。其れで、既に一とほりの事は言つたとは思ふが、尙ほ繰返して考へて見やうと思ふ。

我々が第一に思はなくてはならない事は、我歌は何所までも我物であるといふ事である。此れは自明の事のやうであるが、尙ほ一層明らかにしたいと思ふ。

物質界にあつては、同じ物が幾つあつても妨げない。併し思想界

事に括られたるなれば、其れを捨てゝ詠み試み給ふべし。歌といふは思ふ事たいふ事也。詠むといふは、唯云ふといふ事也。されば思ふ事を云ふなり。思ふ事を云ひて見給ふべし。歌を詠み給ふべからず。たとへば今日の官に、私は淡き身でござるとは申さぬなり。固より古官にも無きなり。然らば淡き身といふ事を、一つ作り出でゝ詠み給ふなり。詞は天地自然の物なり。己れより作り出でゝよからんや。すべて此意を推して、すら〳〵と聞ゆるやう、世にある詞にて詠み出で給ふべし。畢竟歌なればこそすめ、今日の用談を、かゝる作り詞にて云ふ時は、一つも用事は辨じ難かるべし。

右の處を聞き取り、成る程と思ひ給へば、今日より人丸貫之なり。合點ゆかぬ時は、小兒に劣るものなり。思ふ事を云

では、同じ二つの物は要さない。多く似てゐる物も要さない。他に類の無いといふ事によつて、其物に値があるのだ、特色のあるといふ事が、一つの作品の、藝術界に地歩を占める標準に成つてゐる。

古來、優れた作品と言はれて、長い時間を通じて生き殘つてゐる物は、何れも特色を持つてゐる。他の作品の中に置いても、劃然と區別されるやうな所がある。そして此れによつて其生命を保つてゐるのだ。我國の歌人の中の重立つたものを考へて見ても、奈良朝、平安朝、鎌倉時代、德川時代、その代表作家と言はれる位のものは、名を消しても、其作風によりて、誰の作と紛れない程の特色を發揮してゐる。

何故我々は、さう特色を求めるだらう。特色は何故にさう尊いだらう。

或る作者の特色といふのは、其作者によつて、初めて味はれた人生の味だ。其作者でなくては味へない所を、味つて來たといふ事だ。讀者の方から言ふと、此れまで多くの作者も感じず、又自分でも感じなくてゐた味が、其作者によつて味はれたのだ。即ち、其作者によつて、新たに人生の味が加はれたやうに思はれる事だ。此意味によつて我々は特色を重じるのである。

彼等は如何にして此特色を得たらう。自然に得たものか、工夫によつて得たものか。何等か特別の方法を持つてゐるのであらうか。

我々自身は、總て特色を持つてゐる。大小こそあるが、他人とは決して同一で無い所の物を持つてゐる。此れを發揮したものが、やがて特色である。

ちよつと見ると、我々は然うまで特色は持つて居ないやうだ。大抵似てゐて、例へ異つてゐても、其れは僅かのやうに思はれる。我々、我が斯う互に思ひ合ふのは、我々が社會生活に馴らされて、互に圭

ふ事が出來ぬ人は、天下になし。

「思ふ事いはでかなはずそれいへばやがても歌の姿なりけり」

▲新學意見或問に答ふる文

忠友云ふ。師の平日歌はことわる物に非ず、調ぶる物なりと教へ給へると、又、「新學」の初めに「古への歌は調べを專らとせり」と云へるを打ち給へると、矛盾なるやうに覺え侍り古歌の尊と、今の修行地と異り侍るにや。

惑問。「新學意見」を見て、始めて眞淵の教法の非を知り、且つ眞淵生涯の詠歌、僞飾にのみ溺れて誠實を失ひ、其流れを汲む者、悉くかの僞飾の域に墮落せる事を知る。然るに猶ほ議論なき事能はず。抑も詠歌は、常用の舌論にあらず。其聲の感あるなり。此感、

角を去つて、平等であるやうな樣子をしあつてゐるからで、一皮剝いで、心の中まで入ると、皆、それ〴〵特色を持つてゐて、其れが驚くべく異つてゐるといふのが事實らしい。即ち、社會生活の上から見ると似てゐるが、性情、趣味ともいふべき方面になると、全然離れて、孤立し合つてゐる。

この異つてゐるといふのは、其根が淺くは無い。歷史、地理、遺傳、境遇、教育と、さま〴〵な影響を受けて然うなつてゐるので、一朝一夕の物では無い。隨つて移り難いものだ。それに、或る一人の閱歷といふものは、全く其人に限られたもので、人類の中、全く同じ閱歷を踏んで來てゐるといふものは、決して他には無い。或る一人の特質といふもの、閱歷といふものは、他人から見ると、全然秘密なものである。

如何なる人でも、其人が自らを信じる力が强く、自らを狂げず、自らの面目を發揮して行つたならば、必ず他人とは異つた、其人だけの感興があるに相違ない。隨つて、他人には眞似の出來ない作品を得られる譯である。此れは單に理窟ばかりでは無く、古來の優れた歌人といふのは、何れも斯ういふ意味の自覺と、自信との上に立つて、其面目を發揮したのだらうと思ふ。

新しい歌を欲しいとは、何時も變りなく讀者の求めてゐる所だ。作者も其聲に促されて、新しい歌を作らうと思ふ。所で、此新しいといふものは何であらう。

我々は、自分に馴れたものは、他にも馴れた物のやうな氣がする。自分の胸臆の感じといふものは、不思議にも、尊いものでは無いやうな氣が仕がちだ。つまり自信に乏しい。其所で、自分を離れて、何か新しいものを工夫しやうとする。何ぞ知らん、自分の本當の面目といふものは、他人に取つては最も新しいものだ。又其意味

誠實のみにて得る事疑惑あり。「誠實の餘音のみ」と云はゞ、既夫は鄙言のみをいたさん。渠の徒平日の歎息、鄙言のみ。遂に俗調に陥ちて、感聲を得る事生涯あるべからず。然らば誠實の感調も、畢竟習慣なき事能はず。此習慣といふも、感調を得るとする具のみ。感調なる物は、決めて佳調なり。「新學」に「調を專らとせり」と云へると變る事なし。然れば眞淵も、「己がじゝ得たるまに〳〵なるものゝつらぬくに高く直き心をもてす」と云へり。是れ即ち誠實を云つて、さて彼の感調を成就せんと思へる事、古今等しとせり。又、「うたふものなり」と云へるは、曲節など、名を負はするまでもなく、馮驩が劍鋏を彈きて、「長鋏歸來乎食無魚」と歌へる如く、唯聲を長くして歌ふ事なるべし。是れ口に出るまゝに、鋏を拍子に於て、最も尊いものだ。此れを發揮して行けば、其所に新しい歌が出來る譯である。外から取り入れた僅かばかりの智識に冥まされず、自分の胸の中から、新しい歌を生み出すといふのが、最も難事に似て、實に最も容易な事である。

二、盡きざる詩材

千古依然――感情の變化――新しき時代――新たなる自然と人生

わが獨自の詩境を開く、我を發揮するといふと、何となく事々しく聞える、面倒な、用意の要る事のやうに思へる。併し、實際は極めて單純の事だ。

自然といひ、人生と言つた所が、昔も今も同樣だ。我々の感じといふ事を離れて、其方ばかり見ると、千古依然として、聊かの異りも無い。昔の人の眺めた月は、今の者の眺めてゐる月だ。昔の人の泣いた戀は、今の人も泣いてゐる。如何に自然は廣く、人生は複雜であるとしても、此れを其方から見ると、一つの新しい物も無い。我々のみ見られるといふ如き物は、一つも無い。例へ、有つたにしてからが、科學の上では尊いが、藝術の方面では、何の値も無い。

其れならば、獨自の詩境といふ物は、何所に求めるべきであらう。果してさういふ境があるだらうか。

自然も人生も、聊かの變化は無くても、此れに對する者の感じは千差萬別だ。其人々々によつて異つてゐる、決して一致しない。時代が異ふに隨ひ、人が異ふに隨ひ、同じ一人でも、年代が異ふに隨つて異ふ。否、一日々々、一刻々々にも異つて行く。決して停滯してはゐない。

それで、自然も人生も、一つのものとは見えるが、十人寄れば、十の異つた自然と人生とがある。百人寄れば百、千人寄れば千、數

に取つて云へるか。又詩に、「長鋏歸來乎出無輿」と歌へるは前日の「食無魚」に韻を合せたるかと思はるれば、是れ亦口に出づるまゝにと云ふにはあらじ。古人とても思ひ附れたるまゝに歌はん事は覺束なし。一旦調の工夫あるべし　神代より冠辭あり。此冠辭の體種々ありて、自然に云はゝもあれど、「刺す櫛の曉」「玉くしげ二見」などは佳調を致さんとする料にて、更に構へたるものなり。「足曳の山」とは自然にも出づべけれど、「足曳の山時鳥」と續くるに至りては、巧める物と云ふべし。此餘萬葉集など序歌あり。其意を用ひる所、かの「刺櫛、玉くしげ」など同じ。且つ概れ五七音の句法もあり。何ぞ調べを專らにせざらむ。又西土の國風、毛詩などを魁けて、詩とだに云へば必ず韻格あり。韻格なければ平語の

限りない自然と人生とがある譯だ。各自の心の異ふと共に、異つてゐる。

唯自分にのみ見えてゐる自然と人生、他人の見てゐるとは異つて自然と人生、――此れ獨自の境では無いか。我々は巧まず、努めず、一人の人間として生まれて來ると共に、既に獨自の自然と人生とを持つてる譯である。此れは單に理窟では無くて、事實である。

我々は絶えず、此自然と人生とに對して、何事かを感じる。感じるに隨つて、自分の自然と人生とが豐富に成つて來るのだ。此感じたといふ事、此即ち詩材では無いか。獨自の詩材で、誰にも持てない所のものでは無いか。

かう思つて來ると、我々は獨自の境、獨自の詩材といふものゝ、我々の生きてゐると共にあり、生きてゐると共に變化し、生きてゐると共に絶えない事を思ひ得られる。我々は安心して、自分の詩境を拓いて行かれる。

轉じて、此詩材を得るといふ上で、得易い時代と、得難い時代とがあらうか。

誰しも經驗するやうに、我々は、自分の感情の定着してゐない時に於て、割合に多く物を感じる。我々の感情が動搖し、我々の周圍の動搖する時に於て、最も物を感じやすい。即ち、動搖した空氣の中に包まれてゐると、其れと比例して感じを動かす事が多い。

試みに、今の時代を思ひ給へ。國家の上から、社會の上から、個人の上から、今は正しく新たに生まれ出たやうな時代だ。總ての物が新らしい見解を持つてゐる、新しい感情を持つてゐる、新しい勇氣を持つてゐる。動搖して一日も止まない。我國二千年の歷史の中、其內容の豐富で、且つ動搖の度の强く烈しい事、恐く今日のやうな時はあるまい。

み。是等を思ふに詠歌は今も古へも、和漢ともに、眞景實物にあたりたる時、其儘に云ひ出でんとするに、其所思、衆人異り。其調も亦然り其狀貌實に雲と水との如し。然るに其人にして、其自然の調を逐ぐるは、專ら意を用ひ調べ成さゞれば、忽ち俗調に墜つる事決せり。然れば雲と水とをもて比喩とは成し難し。然る時は「新學」の發語、漫りに斥け難し。猶ほ辨ありや如何。

此度の或問、餘りしれものに御座候。御捨て置きなされて然るべく候。併し足下まで不審の事甚しき事なり。問への事は御寄宿中の定談ならずや。何分今少し御執行あるべきやに存じ候。かの雖問を辯ぜずしては、「意見」の妨げにも相成り候やう御申越、是は決して無之事なり。是等の問に答へ居り申し候ては、日暮れ申

現在は、あらゆる方面に於て、仕事を仕なければならない時代であると共に、仕事の仕やすい時である。文藝の方面に於ても同樣だ。短歌の如きも特に然うである。

先づ自然に對して、既成の短歌の中、幾何の新しいものがあるだらう。

世界を周遊して、廣く自然の風光に接した人の語る所によると、我國程風光の美に富んだ國は稀れだといふ。此れは、例の國自慢では無くて、公平に見ての感想であるといふ。そして又一面から見ると、我國人程自然に接近した生活をしてゐるものは無いと言ふ。住居の上からも、食物の上からも、衣服の上からも、我國人は世界文明國中の何れにも優つて、自然と密接の關係を持つてゐる。又我國人の自然に對する趣味は、格別なる發達をしてゐると言はれてゐる。

所が、詩歌の上に表はれてゐる自然趣味の、幾何の程度まで進んでゐるかといふ事を見ると、案外な感がある。事實進んではゐない。此れを、我國よりも劣つてゐるといふ外國に照して見ても、其下位にあると聞いてゐる。

事實、我國幾百千の短歌の作者は、其集の大半を割いて、自然の美を歌つてゐる。が、此れを大觀すると、全く型にはまつた自然だ。我眼を以て、我胸を以て自然を感じ、そして吟詠してあるといふ如き作は、寥々たるものだ。全く歌によつて歌つてゐる。歌ふものとして歌つてゐるといふ範圍を脱しない。花鳥風月、其配合——押繪を見るやうな作以外、生きた自然の力、自然と人間とに亘つてゐる感じと言ふ如きものは、殆ど指を染めてもゐない。現代の者の、自然に對して持つてゐる感情の調子さへも、未だ歌はれてゐない趣があるでは無いか。

候事なり。門に入らざる内は、皆この雖申候事、すべて學者の通論なり。御捨置き成さるべく候。足下の御惑のみ、書附申すべし。

己れ常に、歌はことわる物に非ず調ぶる物なりと云ふは、或は月を見て、誠に月を思はんには、月と云ふを待たずして、其歌ふ言葉に、おのつから月の調べあるが如きを云ふ。悲しき聲ならんには、萬世と祝ふも忌はしく喜ぶ聲ならんには、玉の緒の絶えなんと呼ばふも勇ましかるべし。かの「新學」に「古歌は調を專らとせり云云」と云へるは、古への歌は歌ひ擧げしものなれば、專ら調べに意を盡くせしものなりと云ふなり。專らとせりの「せり」の言葉、かれの僞飾のしるし也。さらば我徒の歌は、「爲す」の意なしやと云ふんに、誠は誠をなすの爲し方あり。されば調べを專らとするに適して居るといふ特長のある所から、多くの作者を其前に導きやすい。多少短歌に指を染めた事があるといふ名によつて、其作者の數を數へる事が出來たならば、實に驚くべき數であらうと思ふ。

然るに、短歌の作者に限つて、新陳代謝が實に多い。素より多數の者は、必ずしも此上で秀でやうといふ如き考は持たず、唯自分の趣味を滿たさうと思つて指を染めるのであるから、幾年も同じ道に携つて居る事を望むのは無理であらう。趣味の變遷といふ事は、誰しもある事で、又あるのが望ましい事でもあるから、一度携つた短歌を棄てるのを以て、其人の罪であるやうに思ふのは誤つて居ると思ふ。

自分の此所に言はうと思ふのは、さういふ趣味の變遷に伴つて別れ去る人に對つては無い、一面短歌を愛す心を殘して居ながら、之人事の方面には、流石に自然と較べると、比較的優れた作がある。少ないとは言へない。併しながら此方面も、まだ多く開拓されて居るとは言へない趣がある。

自然も人事も、現在の所では、獨自の眼を以て對いて來る者を待つて居る如き有樣である。全般から見ると、古い夢はまだ覺めきつては居ず、新しい現實はまだ來ないといふ瀬戸際に立つて居る如き有樣である。短歌は最も努力を要する時であると思はれる。

三、短歌作者の危機

入り易く離れ易し——古き甕と新しき酒——路を拓く苦しみ

最後に今一つ我々の注意して置きたい事は、短歌の作者は、他の物に比較してより多く躓きに逢ひやすいといふ事である。

短歌は其形式の短い所と、我々に第一に起つて來る所の情緒を托

せりといふ語、我徒の言葉ならばさても濟む事なり。眞淵にしてとられぬ事なり。調べといふものも、專らといふ意も氷炭の違ひありて、やがて「爲す」の主意かはる故なり。己が調ぶるものなり」と云ふに、彼が「專らとせり」といふが、似たるを嫌ふより擯斥せるを、矛盾なるやうに聞き給ふなるべし。そも〳〵誠實の詞は、ひとり爲せりと云はんはおもてれを敬して遠ざけて居る人に對つてゞある。甚しきになると、罵つてゐるといふ人に對つてゞある。

短歌の入り易いといふ事は、やがて短歌には型――少くとも型に入りやすい傾向を持つて居るといふ事である。舊派の歌は言ふにも及ばない、既に型に入りきつてしまつて居る。新派の方はと見ると、此舊派の型を破つて、奔放なものとしやうとし、且つ其目的は遂げたにも關らず、更に新しき意味に於て型に入らんとする傾向が見える。少數の人を除いて、多少作歌の經驗を持ち、其手心を得たと思はれる多數の人は、不思議な位ほど似たか寄つたかの境を歌はうとして居る樣子が見える。即ち、詩境とも言ふべき或る限られた所を覗つて、一意其れに定つて居るのでは無いかと思はれる所である。

既に型があるとすると、面白みは其型で盡きてしまはなくてはなにて、調べ爲すと云はんも妨げなし。譬へば花を見て、自ら爲れると云はんも、天のなせると云はんも、同じきが如し。僞飾の言葉は、爲すといふべく、爲れりと云ひ難し。譬へば造り花を、人の爲せりとは云ふべく、ひとりなれりとは云はれさるが如し。我徒の歌は、唯思ふとを述ぶるが中に、大略は先入の習慣にさへられて、其思ふ事を述べ難きを、述べんらない、其れ以上には繋がれ無い。まだ作歌の經驗を持たず、短歌には全くの門外漢で居る間は、如何にも面白さうなものと思へ、其面白みの盡きざるものとも思つて、熱意其れに向つて行くのであるが、其れは短歌の型を得るまでの道程で、其所へ到達すると俄に面白みの索然として無くなつてしまふ感があると言ふのでは無いか。そして離れて行くのでは無いかと思はれる。

我々の情緒を托して行くべき筈の詩歌に、型といふものゝあるべき筈が無い、型を作つて其れで終るといふのであれば、此れ我が情緒の自殺である、短歌の面白い面白くないといふ事より、遙に重大なる問題である。

短歌の如何に關らず、我々の情緒は限りなく生きて居る、生きて發達して行く。若し短歌に型があつて、其爲め面白く無いといふならば、退いて之れを笑ふよりも、寧ろ進んで其型を打破すべきでは

述べんとするが、かの所謂「調ぶるもの也」と云ふ所にて、遂に述べ得たる所、性情の本道にして、萬葉によらす古今に似すと雖し、自然に一佳調を成す。此れ即ち古への調べなり。彼が專らとする調べといふ物は、外に向つて求むる物にて、内の誠をかへり見るの工夫にはあらす。右にて我が説の予盾ならざる事知れ侍るにや。猶ほ不審ならば問ひ越し給へ。彼問のむちやなる事も、此意に推して辨まへ給へ。或問に此「意見」を見て、眞淵が歌の非を悟り彼生涯僞飾に溺れて誠實を失ひ、その流れ悉く其域に入りしを悟る云云とあれば「意見」をば聽きたる者と云ふべし。此上に論す事侍らず。されば晋歌は先づ行き屆きしなり。此上何も云ひ給ふには及ばぬ事なり。只最初の一條腹に入らぬばかりなり。元來調べの

無いか、打破して我が好みに合ふ物を改造すべきでは無いか。一短歌を愛して、此れによつて我が情緒を歌つたといふ緣に於いても、我々はさういふ態度を執つて欲しいと思ふ。

此れが我々の短歌に對する第一の危機である。

此危機は危機には相違ないが、さして打勝つに困難なものでは無い。が、我々は此以上の危機に出逢ふ事がある。

短歌の型は、必ずしも短歌其れ自らにのみあるのでは無い、却つて我々の方にある。我々短歌の持つて居る型は破れる、破つて獨自の境を拓いて行かれる。が、さうして居る中に、我々自身の型を作つてしまふ時が來る、先天の傾向、習練より得たる手心、此等の物が相待つて、何時か自分の型を拵へ上げてしまふ、そして其れを手に入れきつてしまふ。

然るに一面、我々の情緒は絶えず變化して行く。時としては、度

かの間に大いなる變化を來す事がある。情緒が變化すれば、其變化したる物に適する所の發表の形式を求める。此れは止むを得ぬ自然の數である。

さういふ時、我々は持ち馴らして居る短歌によつて、其新たなる情緒を歌はうとする。然るに短歌には既に一つの定まつた傾向を持つて居る、そして俄には改まらない。一面情緒の方は、其傾向によつては歌はれない、何等か新しきものを要求して居るのである。

かういふ際、自己を信じ、自己の情緒を欺くに忍びない程の者は、最も苦痛に感じる。我が新しき情緒を、古き甕に持つて、其れでも好いといふ我慢は出來ない。さりとて從來幾多の苦勞によつて拵へ上げた形式は、破らうと思つても破り盡せない所があるからである。

此所で多くの人は、短歌に顔を背ける。新に努力して、我が新し

事は、我家の一大活手にて、かりそめの定論ならず。社友の中にも、熱々手に入りしは侍らず、況んや或る人に於てをや。調べを知らぬ人ば唯調べを問ふべし。この或問は、我が社友の調べといふ事を餘所ながら聞き或は「意見」を見て、己が限り思ひ取り、さて不審の處を離ずるなれば、當たれる事なきもうべならずや。眞淵が人の評に就いて、又其評をなじると同罪なり。畢竟無實の空論なればゆめ〳〵打捨て給へ。時ありて己れ面をまぢへ侍らば、冒を待たずして其疑ひ氷釋すべきなり。陸にありて水波を論ずる人をば、速に船中に引き入るべし。妄論とゞめずして止む事なり。さりともひそかに其妄論の一二申入れ侍らん。「或問に、其聖あるや、此感誠實のみにて得ん事疑惑あり云云。」誠實をもて感を人に

き情緒を托すべき形式を造る煩を避けて、飜つて他の方面に向つて、其形式を求めやうとするのである。

此れが短歌の作者に取つての第二の危機で、且つ最も苦しいものである。

かういふ危機は、其人の情緒の調子の變化する度毎、飛躍する度毎に起つて來る。二回三回五回と重ねて居る中には、終には短歌に背き去るやうに成つてしまふ。

型に陷りやすいといふ所は、短歌には有り勝ちな事である。此れが大いなる缺點とも言へる。併し一面から見ると、さういふ短歌も、勇猛なる少數の人の努力によつて、月々に變化し、豐富になり、之れを少し以前と較べると、實に驚くべき新樣のものと成つて居る。此れは事實である。

新に短歌に指を染めやうとする者は、豫め此所を承知して居て戒きたい、短歌にはさういふ傾向がありがちだといふ事を含んで、先づ警戒して居られん事を望む。さうすれば、其場合に當つて、さして躓く事も無く、又躓いても比較的たやすく起ち上る事が出來るかと思ふ。

取らん何の疑ふ所ぞ。感は何より得るものと思へるにや。こはいまだ誠實の誠實たるを知らざる者なり。

「賤夫は鄙言のみを致さん云云。」

此れを見るに、いまだ萬葉の東歌など見ぬ人なり。賤き者は鄙言ならん事、もとより也。鄙言なりとて人いかで感動せざらん。賤夫の鄙言は君子の雅言に同じ。鄙言に感なしと云ふにて、感といふ事を

第八編

短歌評釋

萬葉集一斑

作歌の上の參考として、萬葉集の一部を評釋して見やうと思ふ。此集は我國の幾百千の歌集の中、最も古い、最も優れたものである。且つ何等の囚はるゝ所なく、自在に其情緒を歌つてある所に於て現代の短歌と相通ふ節もある。

○

朝寢髪われは梳らじうつくしき君が手枕ふれてしものを

一夜逢つて、別れての朝、女は尙ほ男の事を思ひつゞけてゐる。寢くたれ髪のうるさなのを思ふ。例によつて梳らうかと思ふと、此

知らざるも明か也。

「誠實の感調と云云。」

誠實を吐いて感情なきは、猶ほ誠實を吐き得ざるなり。

「是れ即ち誠實を云ひて云云。」

眞淵が高く直くと云へるを、誠實と推し究めたるはいかゞ。誠實は、高しとも直しともさして名づくるものにあらず。

「馮驩が劍鋏を彈ひて云云。」

この馮驩が歌を、前後つとめて韻を合はの髪も、男の手枕の觸れて、かうなつたのだと心附く。すると、無下に梳つてしまふのは、嬉しい形見を我れと無くしてしまふやうに思はれる。このまゝに仕ておかうと思ふ。

情痴を歌つたものであるが、その態とらしくない所、その調子のゆるやかに、やはらかい所、――云はんとする所を盡して、情景を活躍させてゐる。

○

言にいへば耳にたやすし少くも心の中に我が思はなくに

久しく契つてゐる男女の間、男は止むを得ぬ事があつて、遠く旅でもしてゐて、歸つて來て女と逢ふ、女は一人であつた間の思ひを語つて、怨言をまじへる。其れに對して、男の云つた事のやうに思はれる。

せりと思ふは、又古く歌と云ふものを知らざるなり。又已れ歌は思ふまゝを述ぶるなりと云ふを、口に出るまゝと心得、思ひ付きたるまゝに歌ふ事と覺えたり。笑ふべし。

「この冠辭の體云云。」

この枕言の論は、かりそめに似て大論なり。かの調べを知らざる人の語る境にあらず。誠の情を吐く事を得たる人、知るべし。或る人はおきて、足下と雖も知り給はざる事なり。かの船中に入りて後、楫棹なくてはあられぬ事を知るべし。陸行く人、楫棹は無用の長物なりと云はんが如し。されば序枕はもとよりにて、五七の句調も自然より出づるものなり。けり、らん、などの助辭も、感情の嗟嘆より自然に出づる韻調なるを知らず、助辭もて詠歌は作りなすものとのみ思ひなせるの類より、これらの

思つてゐた、――さう云つてしまへば其れぎり、何でもないやうだが、心の中では、隨分いろ〳〵に思つてゐた。

一首の口氣から、前後の有樣が想像させる。この、たやしく想像せる所が、値のある所だと思ふ。

○

あぢきなく何の狂ことと今更に童言する老い人にして

さ或る時の事、女に對ふと、若々しい思ひが胸に甦つて來て、我れ知らず其れを言葉に現はした。そして後に成つて考へて見ると、自分はもういゝ年、無分別に、かういふ事をするべき年ではないと、恥づかしく思ふ、そして我れと我れを罵つた。

境遇に從はうとする苦しい心、それがよく現はれてゐる。さながら口語のやうに、彩もなく現はしてあるのが力強く感じさせる所以であらう。其所に値があると思ふ。

○

夕ざれば君來まさんと待ちし夜の名殘ぞ今もいねがてにする

男と絶えてしまつて、今は一人になつてゐる女、眠らうとして眠られない。そして其の眠られない譯を思つて、此れは、君が來るか來るかと思つて、寢ずに待つてゐた、其頃の癖が殘つてゐるのだと、心に呟く。

思ひ諦めやうとして、諦められずにゐる心の姿が、婉曲に現はれてゐる。女の稍世馴れた樣も想像される。其所に趣がある。

○

時守の打ち鳴す鼓よみみれば時にはなりぬ逢はなくも怪し

何時に逢はうと約束してある。その時を待つて、一時々々と、女

不審は起る事なり。委しくは再會に說き申すべし。狐を議する者には、狐を捉へて見せ、虎を議する者には、虎を捉へて見するがよし。是れ活手段と云ふ。議論忽ちに止むなり。目のあたり、犬にあらず猫に似ざるを知る故なり。足下この手段に疎し。速く議論をすてゝ、野に山に獵り給ふべし。

「忽ち俗調に墮つる事決せり云云。」

こは意を用ゐされば

は時を知らせる鼓の音を數へてゐた、今又鳴るのを數へて見ると、丁度約束のその時、女は心を躍らして待つ、が、男は見えない。何うしたのであらう、何か障る事も出來たのではあるまいかと案じてゐる。

女の有樣、——宮近く住んでゐる、さるべき家の娘、其の家など、はつきりと感じられる。男も宮に仕へてゐる者であらう。叙事の面白みを盡してゐるものと云はれる。

○

燈火のかげにかがよふうつせみの妹が笑まひの面影に見ゆ

女と別れてゐて、それを思ひやると、一夜、燈火の下、美しい顏に笑みを浮べてゐた、その時の顏が、はつきりと眼の前に現はれて來る。

得しらべなさゞる人の思ふ所なり。されば果して俗調なり。すべて雅といひ俗といふを、東西黑白のやうに覺えて、俗即ち雅、雅即ち俗なる事を知らざる世人の常なり。さるから漫りに雅俗を云ふめり。和洲とも此れを聞き知る人甚だ稀れなり。さればかの、自然を述べたりと思へるは俗にて、俗調に落ちたりと見るが雅ならんも量りがたし。

又なく美しく見えた瞬間の姿、そればかりが思はれるといふのは自然の事、其所を捉へてゐるのが、此の作の力ある所以である。

○

難波びと葦火たく屋の煤したれど己が妻こと常めづらしき

女は多くある。けれど自分の妻が一番いい。古くは成つてゐるが、それと共に馴れてゐるといふ中に、何にも代へ難い心安さがある、何時見てもめづらしく思はれる。

古いといふ事を、難波の浦に、蘆を焚いて、その爲めに煤けてゐる家の古さを譬喩に取つてゐる。此の譬喩が、極めて適切であるばかりでなく、老實なる人、老實なる感情が、全體に響き渡つてゐる。譬喩が此の作の値である。

○

「新學の發語に云云。」

「すべて物の譬へは、十が二三ばかりにして匂ひばかりを取るものなり。さらでは譬へて益なき事いはれあり。雲の過ぎ行きかれて山に棚びき水のとく流れて波をなすが如きは、やがて人情の事に物にいざよふ樣なり。雲水や人情や、さらに私なきものぞ。是れを比喩しがたしとするは、己れかの「古今正義」に云ひし、王に金をあつる徒なるべし。風情を語るに足らず。斯くは云へども、實に譬へを得ざらば、たとへ直すべし。さて此論も足下の爲めに申し侍るなり。必ず或る人に見せ給ひそ。大方其非を悟らずして、妄論ます〳〵つのるものなり。されば其人の爲めならず。只己れは辨じ得ずと答へおきて、さて漸々に諭し給へ。比叡と愛宕と何れを云はんは都にありての論なり

君に戀ひいねぬ朝けに誰が乘れる馬の足音ぞわれに聞かする

男を戀ひて、一夜眠れずに明かした朝、心重く坐つてゐると、門の外を、誰れの所へ通つた男の歸るのか、馬の蹄の音が聞える。それを聞くと、直に、昨夜の思ひは胸に歸る。嫉みも覺えて來る。自分の悲しい時、他の喜びを見て嫉む女の心、其實際があらはれてゐる。「われに聞する」といふ言葉が、如何にも生てゐて、一首に響く。

○

爭へば神も憎ますよしゐやしよそふる君が憎からなくに

或る男を自分に擬へて、人がとやかくと云ひ囃す、さういふ氣はないのだから、十分云ひ爭つて、云はせないやうにするべきだ。だが、云はれて考へて見ると、自分も其の男を憎いとは思つてゐないらしい。それに第一、爭ひといふ事は、神の憎みます事であるから、神の心には反ふまい。まゝよ、云はるゝ儘にして置かう。

心には思はなくても、人に云はれると、つい然う成らうとする。然う成つても、其れを自分の心からとはしなくて、責を他に托けやうとする。さういふ心持ちが、不十分ながらにも現はれてゐるのが面白い。

○

眞袖もて床打ち拂ひ君待つと居りし間に月傾きぬ

共寢の床を清めやうと、袖をもて床を拂ひながら、今か〳〵と、男の來るのを待つてゐる。男は來ない。眺めると、夜も更けたが、月は大分に傾いて來た。

戀の歌で、ありふれた事を云つてゐるのみであるが、少しの厭味もない、そして調子が高い。魅する所のある歌だ。女の氣高い樣

知らざる人に對して高低を爭ふべけんや。見ざる論は、比叡愛宕すら議しがたし。いはんや千載不傳の調べの上に於いてなや。病中の長文例の出まかせのなぐりに候へば、定めて得讀み申すまじく、御推覽下さるべく候。御尋の如く四九の諱日には、岡崎に歸り申候也。猶ほ御答へ申すべき事多端に候へども、大いに疲れ、追便と申し者き候。

が、そぞろ想像されて來る。

○

この夜らの有明月夜ありつゝも君を置きては待つ人もなし

我れ世に在りながらへても、思ふは唯一人の君のみ、他には思ふ人のあらうとも思はない。

現はし方の自然なのが面白い。「この夜らの有明月夜」の二句、「在りつゝも」といふ爲めの序であるが、それがよく響いてゐる。それと共に、「待つ人もなし」といふのも、力のあるのを覺える。

○

彼方の赤土の小屋に小雨ふり床さへ濡れぬ身に添へ

我妹

男と女と路に逢ふ。男は人目を避けて女と語らうと思ふ。見ると、近く賤の屋がある。其所へ女を連れて行つた。語つてゐる中に、小雨が降り出す。屋根を漏つて、寢てゐる床の上までも濡れる。男は女をいたはつて、更に此方に寄れとすゝめる。自分を、何所までも客觀的に描き出して、其の中に、やさしい情を含ませてある。現はし方が巧みである、其れが面白い。彼方は、古くは餘り遠くない所、あつらといふ位の意。赤土の小屋は、土の上に筵など敷いて住む程の賤しい家。

○

櫻麻の苧原の下草露しあれば明かしてい行け母は知るとも

女が母に隱れて、男の家へ來て一夜を明かす、朝、女は母の眼さめぬ中、歸らうと云ふ。男は外を見ると、女の行くべき道は、打ち續いた苧原、それに露が置いてある。下草は、さぞ繁く置いて

▲香川景樹の歌

景樹の歌集には「桂園一枝」と「桂園一枝拾遺」の二部がある。漏れた物もあるが殆ど全部其中に收められてゐる。此所に拔くのは「桂園一枝」の中からで、彼として初期の作である。

野外朝霞

然の聲する野邊に立つものは我と朝の霞なりけり

然

鶯の啼く初聲のうれしさに獨りおきつるあさぼらけかな

待鶯

ふしなれし去年のねぐらの臭竹はよも鶯の忘れざるらむ

毎朝聞鶯

朝な〳〵おなじところに聞ゆれどあらたまりゆく鶯のこゑ

關路聞鶯

ふたゝびは越えじとおもふ陸奥のいはでの關に鶯の啼く

暗夜梅

梅が香のにほはざりせばぬば玉の闇の春ぬるだらうと思ふ。その中を、濡れて行くのかと思ふと、かあいさうに思へて、夜が明けてに歸れ、さうすれば露も乾く。たとへ母に知れても、さうしろと勸める。

對話の一句を描いて、全體を髣髴させてある。如何にも生きてゐる。

「さくらをの」は枕辭。「い行け」の「い」は發語。

○

はつせ川速み早瀨を掬びあげて飽かずや妹と問ひし君はも

男が絶えてしまつた後、女は其の男の事を想ひ起す。すると或る時、男が、君は我れに飽きはしないかと尋ねた事がある、其の時の事が胸に浮ぶ。あゝ云つて置いてと、男が今更のやうに怨めしく成つて來る。

たゞ誰か知らまし

柳

うちはへし柳の糸は菅の根の長き春日にあはせてぞよる

水郷柳

三島江のたえまの里の河柳色こそまされのぼりくだりに

遠村柳

山もとに立てる煙も青柳の靡く方にと靡く春かな

春月朧

おぼつなかおぼろおぼろと吾妹子が垣根も見えぬ春の夜の月

題しらず

上の三句は、「飽かずや」の譬喩。暑い時、喉が乾て、水を掬んで飲んで飲んでも飽かない、その意味を取つてある。

餘情の多い作。才氣に富んでゐる。

○

隱沼の下に戀ふるは飽きたらず人に語りつ忌むべきものを

隱沼のは枕詞、下には心の中には。忌むべきは慎むべきものをの意。

人目を忍んでゐる戀、もとより人になど洩らすべきものではない、又其の積りでもゐた。が、其の苦みと樂みと、胸に餘つて、默つて居るだけでは滿足が出來ず、つい浮かゝと喋つてしまつた、そして後になつて、飛んだ事をしたと、悔いたとの意である。

忍ぶ戀の苦しく、死ぬばかりに思ふといふ境は限りなく歌はれて

旅にして誰にかたらむとほつあふみいなさ細江の春のあけぼの

深夜歸雁

春の夜の朧月夜にれざめして堪へずや雁の思ひたつらむ

田家櫻

暖の男がかへす垣根の小山田にまけるがごとく散る櫻かな

河上花

大井川かへらぬ水に影見えて今年も咲ける山ざくらかな

清水寺の夜の花見にまかり

ねる。しかし、其所までは到らず、苦みと樂みと相半ばしてゐて、ともすれば問はず語りにしたいといふやうな境は、まだ多く歌つてない。さういふ所を捉へて、自然に歌つてあるのが面白いと思ふ。

○

疊こも隔て編むかず通はさば道の柴草生ひざらまし

を

隔て編むといふのは、藁と薄を一筋置きに編むやうにする事。疊菰を編むには、桁といつて木を横に渡して置き、菰槌といふもので編み緒を卷いて、此れを桁へ懸けて置き、さて桁の上へ藁を載せては、此方の槌を彼方へ、彼方のを此方へとよこして編む。此所では、其の槌の往來の度び繁い事を譬へに取つてゐる。

女が、自分の家へ通ふ道に、柴草が生ひ繁つてゐるのを見て、其れは踏む人の少ないからだと思ひ、契つてゐる男が、若しあの疊菰

てよめる

いにしへの花の影さへ見ゆるかな車やどりの春の夜の月

燕來

語らはん友にもあらぬ燕すら遠く來るは嬉しかりけり

夕對卯花

白妙の卯の花垣の夕月夜さすとはなしに物ぞかなしき

與女待郭公

妹とわが二人聞かんの一聲をれたくもなしむほとゝぎすかな

夏月

とけて寢ぬ子もち島

を編む槌の數ほども通つて來たならば、かうはなるまいものをと呟いたとの意である。

疊菰は、譬喩に取つてゐるだけであるが、讀んで見ると、女が自身其れを織つてゐて、實際から思ひよせたやうに思へる。又、道の柴草といふのも、其所に立つて見たのではなく、野の中の小さい家、仕事をしながら眼を擧げて見ると、直ぐに其道が見えたのであるやうに思へる。男を思つて、手にしてゐる槌に思ひよせ、そして道を眺めたといふのであらう。感情はありふれてゐて、取り立てゝ云ふ程ではないが、其れを現はすに、美しい物も假らず婉曲にもしず、直ちに身邊の物に寄せて、そして鄙びて云つてゐるので、如何にも眞實に思へる。そこが面白いと思ふ。

○

里中に鳴くなる鷄のよび立てゝいたくは泣かぬ隱妻

の一聲にやがて明けゆく月のかげかな

樹陰夏月

なか〳〵に檜の若葉のひろければかへるひまより月ぞ見えける

題しらず

大空に月は照りながら夏の夜は行く道くらし物かげにして

風前夏草

河ぎしの根日高がや風吹けば波さへ寄せて涼しきものを

題しらず

春風につのぐみ初めし津の國の難波の葦は今ぞ刈るらむ

深夜螢

小夜ふけてもゆる螢のかげ見れば今はと聲も立てつべきかな

納涼

山かげの若井の清水くみとりて照る日熱しくなりにけるかな

聞蟲

更けゆれば傾く月とわれながら聞く人もなき蟲の聲かな

秋田風

おり立ちて昨日か摘みし芹川の竹田の原に秋風そ吹く

故郷秋夕

はも

鷄は多く鳴くものであるから、其の意味で、自分の泣き得ぬ對照に取つてゐる。隱妻は內々の妻、母の許に隱れてゐるもの、又は心の中で其れを定めてゐるだけのもの、此所は後者であらう。はもは、嘆きの助辭。

鷄は里中に、憚るところもなく、自由に啼いてゐる。しかし自分は隱妻で、人目を兼ねなければならない身であるから、物を云ふのも自由にはならぬ、否、泣くにも泣かれない、泣きたい時にも、そつと忍んで泣いてゐるの意である。

隱妻の悲しい事を云ふのに、里に啼いてゐる鷄をかりて現はしてゐる。如何にもかけ離れた物を取つて來てゐるが、讀んで見ると少しもさういふ感じがない、むしろ自然に思へる。此れも、恐らくは實際から取つて來たので、晝の靜かな時、つく〳〵自分の身の悲しさを思つてゐると、ふと鷄が他を呼び立てるやうに頻りに啼いたので、其所から感を起したのであらう。隱妻はもと、つきつめて云つた調子で云つてゐるのも、さういふ場合であつたからと思へる。此れも譬喩が譬喩ばかりでなく、實際の事のやうに思へる其の適切な所が生命のやうに思へる。

○

人妻に言ふは誰が言さ衣のこの紐解けといふは誰がこと

人妻は、人妻が自分をさして云ふ言葉。言ふは誰がことは、云ひ寄つた男をとがめた言葉。

男が人の妻に云ひ寄ると、女は其れを拒んで云つたので、意味は明らかである。

簡單な一句であるが、複雜した事柄を髣髴させてゐる。女が人妻

いかならん我がまだ住みし昔だに悲しかりつる秋の夕ぐれ

月

大方はうときものなる大空もすむ月ゆゑは聽まじきかな

獨見月

今こそあれ獨りのみにもあらざりし昔の秋を月やとふらむ

峰月照松

いたづらに思ひし峰の一つ松こよひ月こそすみのぼりけれ

月前松

松陰に立ち隱れても見つるかなあまりに月の限しなければ

月照流水

ゆく水の末はさやかにあらはれて川上くらき月の影かな

月前照故郷

いづくにか今は住むらんと故郷の月もや我を思ひ出づらむ

夕靄

山の端の豐旗雲に打靡き夕日のうへを渡るかりがね

遠村霧

山崎をわが立ち來れば朝霧のたえ間に見ゆる櫻井の里

鳴

といふ自分の位置を意識して、嚴として拒んだ樣子、せき込んで、繰り返し云つた樣子など想像が出來る。優れた作と思ふ。

○

玉勝間逢はんといふは誰れなるか逢ひし時さへ面隱しせす

玉勝間は枕詞。

男と女と相逢ふと、女は恥ぢらつて面を隱してゐる。男はそれと知りながらも、戯れて、逢ひたいと云つてゐた癖に、かうして逢つた時までも面を隱さなくても可いではないかと云つたのである。

男の言葉の一句で、女の嬌めいた姿、男のそれに對してゐる樣子までも現はれてゐる。一句の描く言葉もなくて、十分に描き出してゐるのが面白い。逢へる時さへのさへも、よく響いてゐる。

○

わが齡し衰へぬれば白妙の袖のなれにし君をしぞ思ふ

袖のなれにしは、着物を着古して、なれてしまつたのと、年久しく馴れて來たといふのとを兼ねてゐる。

年寄つたる女が、男に對つて云つた言葉で、かう齡が衰へて來ると、誰れよりも、年頃馴れて來てゐる君が親しく思はれるの意である。

若い中は、思ひも多く迷ひも多いが、年寄つて來ると自ら單純になつて、善惡といふ事よりも、心安いといふ事が第一に嬉しく思へるであらう。又其れを率直に飾り氣なく云つてゐるのも、年寄らしい、淡泊な中に味ひがある。

○

字多の野に鳴が羽かく音高しわな張る人の聞きもこそすれ

菊映水

いづくより駒うち入れむ佐保川のさゞれにうつる白菊の花

題不知

夜を寒み寢ざめ寢ざめて明け方の霜と共にも結ぶ夢かな

寒月

照る月の影の散り來る心地して夜行く袖にたまる雪かな

霙

しぐるゝは霙なるらし此ゆうべ松の葉白くなりにけるかな

行路霰

玉ぼこの道ゆく人もうちかづく袖にひとむらふるあられかな

初雪

捲き上ぐるしのゝ簾のさら〳〵に思ひもかけぬ今朝の初雪

遠山雪

都より雲井に見ゆるかつらきの高嶺さやかにつもる雪かな

閑居埋火

底ぬるき火桶ばかりを友としてくらす老ともなりにけるかな

題しらず

靈合はば相寢んものを小山田の鹿猪田守るごと母し守らすも

靈合はばは心が合つたならば。鹿猪田守るごとは、鹿猪が山田を荒らすのを、荒らさせまいと番をするやうにの意。

女の母を怨んだ言葉で、心が合つたならば、終には相寢る事もあらうものを、母は鹿猪が山田を荒らすのを番をするやうに、自分の番をしてゐるとの意である。

娘が自分の信ずる所を執つて動かず、母の一心になつて番をしてゐるのを、怨みつゝ一方には嘲り顏に見てゐるのが、言外に溢れてゐる。其所が面白い。母の番をしてゐるのを、鹿猪田守る如と云つてゐるので、母の樣子の業々しい所、其の住んでゐる邊りまで想像される。

○

天地にすこし至らぬまするをと思ひし我れや雄心もなき

天地にすこし至らぬは、今少しにて天地にも行き足る程の意。戀に囚はれて、雄心も全く失せてしまつたのを呟いたもの。意味は簡單である。

戀する身の心弱さを歌つたものは多いが、かう一面に堂々たる衿りを持つてゐる作は、餘り多くはない。そして其の衿りが、如何にも大きく、其れを云つて浮響のないのも見難い事である。對照の面白みを盡してゐる作である。

○

久方の天つみ空に照れる日の失せなん日こそわが戀やまめ

意味は極めて單純で、天日を誓ひに取つて戀を云つたものであ

埋火の外に心はなけれども對へば見ゆるしらとりの山

題しらず

かれの音は聞えずながら百式の新なめ祭夜は更けぬめり

老後歳暮

なれ〳〵て年の暮とも驚かぬ老のはてこそあはれなりけれ

郷につき時にふれたるしの簾おろしこめたる心をも動かし初めつ春のはつ風

○

青柳の糸の絶間に見る。

戀らぬもの、あるまじき事を譬に取つて、戀を誓つた作は限りなくあるが、多くの場合作爲の跡があつて、隨つて忌味を帶びてゐる。此の作は、さつぱりと男らしく、あるまじき事を云つてゐながらも自然に聞える、そこが面白いと思ふ。

○

淺茅原茅生に足踏み心苦みわが思ふ子らが家あたり見つ

障る事があつて、妹に逢へずにゐる男が、侘しさに堪へられず、畦、他所ながらもせめて妹の家でも見やうと思つて出懸けて行つた。妹が家は原を距てた彼方、原には淺茅が生べてゐて、心も空に辿る身は、をり〳〵其れを踏んで足を傷つける。そしてやう〳〵、妹が家の見える所まで行つて、佇ずみ望んだ。

ゆるかなまだとけやらぬ大ひえの雪

○

ひろなりは大方疊るこの頃の朝毎に啼く鶯のこゑ

○

靜かなる月にと對ふ曙の心も知らぬ百千鳥かな

○

行けど〳〵限りなきまでおもしろし小松が原の朧月夜は

○

妹と出でゝ若菜摘みにし岡崎の垣根こひしき春雨ぞ降る

多く言はずに、男自らの有樣をよく現はしてゐる。第三句の「心苦み」といふのが第一句にあるべき順序であるが、さうせずに、路の苦しさを先に描いてゐるので、其の有樣がより明らかに感じられる、措辭の妙であらう。

○

拒楷越しに麥食む駒の罵ゆれど猶し戀ふらくしぬび かねつも

女は男を戀つて、父母の目を忍びて、機がありさへすれば逢はうとする。父母はそれと悟つて、口やかましく叱りつ拒てつする。が、女は諦められない、否、さう爲れる程一層逢ひたい思が募るやうに覺える。

上二句は、罵られる譬喩に用ゐてあるので、拒楷は、今「ませ」と言つて馬屋の前に横に木を渡して、馬の出られないやうにしてあるそ

○
吾岡に今日も來てつむ少女子の其名だにこそ聞かまほしけれ

○
野の宮の柴の下路けふ來れば古葉と共に散る櫻かな

○
春の野のうかれ心は果てもなしとまれと云ひし蝶はとまりぬ

○
ちゝこ草母こ草おふる野邊に來て昔戀しく思ひけるかな

○
白柴のみづ枝動かす朝風に昨日の春の夢は覺めにき

○
夜牛の風春の穂立に音づれて螢飛ふべく野はなりにけり

○
郭公しば〳〵啼きし明け方の山かきくもり小雨ふりきぬ

○
五月雨の雪吹きすさぶ朝風に桑の實おつる小野はらの里

○
夏の夜の月のかげなる桐の葉を落ちたるのかと思ひけるかな

れである。馬屋の前の土間には麥が乾してある、馬はそれを食はうと、ませ越しに頸を伸すと、側にゐる者が叱つて食はせまいとする。其所を思ひ寄せたのである。

譬喩が鄙びて、おどけらしくも聞えるが、如何にも切實で、恐らく目前の事實から取つたのだらうと思へる。唯罵られると言ふばかりでなく、駒の繰り返し〳〵するのと、女の懲りずに居る有樣の似た所、女の家の有樣まで、此の譬喩によつて親はれる思がする。

○
さ檜の隈檜の隈川に駒とめて駒に水飲へ我れよそに見ん

男の歸さの路には、檜の隈川がある、其所へ行つたならば、駒に水を飲ふ爲めに立ち留まれ。見ても見飽かぬながら、人目を兼ねてよくも見られずにゐる姿、我れ他所ながらのやうにして、せめて今少し見やう。

女が男に言つたもの、朝、別れる時の歌か、其れとも他の場合のものか、何れにしても別れを惜しむ心であるが、趣は、其れよりも、其の現はし方のおほらかな餘裕のある所で、一讀、涙を以て見送るといふよりは、水際に立つて駒に水を飲つてゐる男の姿の美しさを、恍惚として見送るといふやうに感じさせる。此れが際立つた所である。「さ檜の隈、檜の隈川」と同じ言葉を重ね、「駒とめて駒に」と繰り返してゐるのも、此の感じを助けてゐる。

檜の隈川は大和の高市郡にある。

○
能登の海に釣する海人のいざり火の光にい行く月待ちがてら

荒涼たる北陸の海、月のまだ出ぬ程の夕闇、かすかに見える海人

○

根をたえてさざれの上に咲きにけり雨に流れし河原なでしこ

○

朝踏めど露もしめらぬ水無月の野づらに咲ける月草の花

○

近わたり夕立しけむこの夕霧ふく風のただならぬかな

○

わが宿にせきいれて落す道水のながれに枕すべき頃かな

○

數妙の夜ごとの下のいざり火を當てにそゞろ歩きする姿が、ほのかながら浮ぶ。取り立たゝ何所と言ふ事はないが、趣のある作である。

「い行き」の「い」は發語。

○

筑波根の新桑繭の衣はあれど君が御衣しあやに着ほしも

常陸國の歌として載せてあるもの。常陸の少女が、都より下つてゐる官人の雅やかな姿を見て、心の中に戀つて、婉曲に其の思を打吐やいたものと思へる。

新桑繭の衣とは、新しい繭から織つた着物、即ち自分の立派な着物の意。「着ほし」は、共寢する時には、二人の着物を重ねて着るので、其の意味から言ふのであらう。

○

きりぎりすわがさざめごと人に語るな

○

殘りなく松のすがたはあらはれていまだ離れぬ山の端の月

○

歸るべく夜は更けたれど鴨川の瀬の音は清し月はさやけし

○

家路まで送らん月の影ながら別れて歸る心地こそすれ

○

月照ればつらつら椿その葉さへみな白玉と見ゆる夜半かな

駿河の海おし邊に生ふる濱つづら汝を頼み母にたがひぬ

駿河の歌として載せてあるもの。「おし邊」は磯邊を訛つた言葉「濱つづら」は濱に生へてゐる葛で、其蔓が長く廣く這ひまはつて居るもの。それで其葛を以て、長く、絶えないといふ譬喩にして居る。

女の歌で、母の反對するのも聞かず、強ひて思ふ男と姑婚した其當時の作であらう。思の叶つたといふ心足らひがあると共に、一方では自分の心細い立場である事を思ひ、それを種に、男に絶えるやうな事のないやうにと、行末を懸けて頼む意がある。そして此二つの意が、打つけではなく言つてある。此情の轉移と、實際的な所とに、微かながらに面白味がある。鄙びた所のない作だ。

○

○

こともなき野邊に出でても見つるかな鶯が鳴くの音のおはただしさに

○

何事もこの頃にはと思ひつる三十ぢの年のはてぞ悲しき

○

思ひやれ天の中河ながば來てたゆたふ旅の心細さを

○

宮士の根を木の間〳〵にかへり見て松のかげ踏む浮島が原

○

戀しけば袖も振らんを武藏野のうけらが花の色に出

なゆめ

「戀しけば袖も振らんを」は、戀しくあらば袖を振る事があらうといふ意。今ハンケチを振つて、其れと思を知らせるやう、其當時は袖を振つたのである。「うけら」は山中にある草で、白い花と、白に紫を帶びた花とが咲く。此所では、其紫に咲くのを思つて、色に出づと言つて居る。そして此れを以て、心には思つてゐても色に現して、人に知られるやうな事があるなといふ序にして居る。

女が、忍んで逢つてゐる男に言つたものである。戀しさに堪へられない時には、自分は袖を振つて誰にも分らないやうに、そつと思を知らせる。其れを見て自分の心を悟つても、決して悟つたやうな色はするな、他の人に知られては可けないからと言ふのである。

戀に醉つた、うら若い少女の姿が寫された作だ。自ら美しく思はせる所も、此作の値である。

○

にほどりの葛飾早稲をにへすとも其かなしきを外に立てめやも

下總の歌として載つてゐるもの。「にほどり」は枕詞。「葛飾」は地名。「にへ」は神に牲をするの意で、其年に穫た第一の稻を神に捧げるので、今の新嘗の祭である。當時は公に於てされるのは固より、普通の民家でも行つたものと思はれる。そして此神事を行ふ場合には、他人の入り來るのを忌んだものと思はれる。「かなしき」は深くいつくしむ意。

女の忍んで通つて來る男を思つて詠んだ歌である。君が通つて來たならば、如何なる場合にも、決して外に立たせて、內へ入れないやうな事はしない。其爲とならば、我家の第一の神事である新嘗の

鷗飛ぶちぬわに立てる濱市の擊浦波に通ひけるかな

○

明石潟松の木かげに路はあれど磯づたひして若め拾はむ

○

鴨川に浮ぶあひるの朝な〳〵足らずなりゆく數ぞ悲しき

○

空に散る鳥の一羽のかろき身を置きどころなく思ひけるかな

○

經の實の一つ二つのねがひさへなること

縫きわが世何せむ

○

花がたみ造る狭山の育つゞら手に手をこそは組ままほしけれ

○

若草を駒に踏ませて垣間みしをとめも今は老いやしぬらむ

朝

思ふこと寢覺の空につきぬらむあした空しき我心かな

題しらず

限なく悲しきものは燈火のきえての後の寢ざめなりけり

同じく

祭の夜、神に不敬の罪を蒙るのも厭ふまいと言ふのである。思ひつめた女の情が、あらはではなく、力強く言はれて居る。そして其れが、此例によつて、初めて適切に言ひ現されて、言ひ難き韻を帶びてゐるのを思ふ。

○

信濃路は今の墾道刈りばねに足踏ましむな沓穿け我

背

信濃の歌。「信濃路は今の墾道」といふのは、和銅六年に木曾路が初めて造られた其當時の事であらう。「刈りばね」は草木を刈取つた其跡に殘つてゐる根で、蹈むと怪我をする。女の歌で、新しく開けた木曾路を通つて來る男に、刈りばねを蹈んで怪我をしないやうに、沓を穿いて通ひ給へと注意した言葉である。自分を主とした多くの戀の思よりも、先方を思つてする僅かの心づかひの中に、却つ

燈火のかげにて見ると思ふまに文の上白く夜は明けにけり

垂雲軒夢宅が信濃なる伊奈の故郷へ歸るを送りて

玉の緒は長く短き世なりけり又あはざらむ又は逢ふらむ

八條相國六百五十回の御わざ行はせ給ふに秋夢といふことを給はりて詠みて本りける

遠ければ昔にいたる夢もなしさばかり長き秋の夜なれど

尉と姥のかた

て深いあはれか感じられる。此歌の妙は其所にある。そして遠い路を夢心地になつて辿つて行く男、其れを待つて、まめ〳〵しくして居る女の有樣も、おぼろげに想像される。

○

信濃なる千曲の川の小石も君し蹈みてば玉と拾はん

同じく信濃の歌で、女の男を思つたものである。千曲川の川原にある小石、其限りなくある石も、君に蹈まれ、君に觸つた石であるならば、自分ば尊い玉とも思つて拾はうと言ふのである。何所までも抒情風な、綺麗な所に妙味がある。そして前の歌とは異つて、うら若い、處女の聲らしい所に別種の趣が感じられる。

○

日の暮に碓氷の山を越ゆる日は背のが袖もさやに振らしつ

相生の松におく霜神さびて千世のすがたとあらはれにけり

寄神祝

すべらぎは現つ神なり秋津島動くべき世のあらむと思ふな

同じく

天地の何れの神かうけざらむ御代やすかれといのる願を

黒木うるかたにめせやめせ夕けの煙木はやく召せ歸るさ遠し大原の里

上野の歌。「背の」は夫、「の」は「根」と同じ意味で、親しみ尊む意を籠めた言葉。妻の歌である。

夫の旅へ行くのを、妻が送つて行つて別れた時の歌である。夫は日の暮、嶮しい碓氷の嶺を越して、遠き旅へ行かうとする。妻は其れを送つて、遠くなるまでも袖を振つて、別を惜しむ。すると夫の方も、振り返り〳〵〳〵袖を振つて應へる。それが遠く、妻の眼にはさやかに見えたと言ふのである。

日暮の旅立、碓氷の嶺、別れ惜しむ有樣、何となく意味ありげに感じられる。そして心細く淋しい思を殘させる。淡々と、別れと言はずして、然う感じさせるのは、内に籠つてゐる情が、おのづから情と成つて胸に傳はるからであらう。忘れられない節がある作だ。

短歌作法　終

明治四十二年一月一日印刷
明治四十二年三月一日發行

通俗作文全書
定價表
六冊 金壹圓九拾錢 送料參拾六錢
十二冊 金參圓七拾錢 送料七拾貳錢
廿四冊 金七圓貳拾錢 送料壹圓四拾四錢

著者　窪田空穗

發行者　東京市日本橋區本町三丁目八番地　大橋新太郎

印刷者　東京市小石川區久堅町百〇八番地　市川七作

印刷所　東京市小石川區久堅町百〇八番地　博文館印刷所

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

短歌作法奥附

著作權所有

定價金參拾五錢

通俗作文全書

記事論說或は紀行叙事等の雄篇大作より、尺牘葉書の日用文に至るまで齊しく是れ文なる以上は、文明社會の人は皆文を以て互に意思を通じつゝある者と言ふべし、然るに今日の狀況を見るに百般の藝術駸々乎として進歩するに反し作文の技のみ獨り退歩の觀あるは洵に痛嘆の至りといふべし、是れ多數の人士が文章に重きを置かざるに由ると雖も、從來作文法を敎ふる完全なる書籍なきも亦其一因なりといふべし、弊館之を遺憾とし、通俗作文全書を發行し聊か以て此缺點を裨補する所あらんとす、乞ふ愛讀を給へ。

書目

（既刊）

- 第壹編◎文章組立法……大和田建樹君著
- 第貳編◎書簡文作法……大和田建樹君著
- 第參編◎美文作法……田山花袋君著
- 第四編◎商業作文法……天城安政君著
- 第五編◎支那時文軌範……青柳篤恒君著
- 第六編◎紀行文作法……四村醉夢君著
- 第七編◎寫生文範……鷗田琴月君著
- 第八編◎論說記事文範……河井醉茗君著
- 第九編◎女子消息文範……西田敬止君著
- 第拾編◎書簡文範……森田米松君著
- 第拾壹編◎日記文範……大和田建樹君著
- 第拾貳編◎祝賀弔祭文範……石崎篁園君著
- 第拾參編◎中等學生文範……山川直五郎君著
- 第拾四編◎明治時代文範……生田星郊君著
- 第拾五編◎言文一致文範……堀江秀雄君著
- 第拾六編◎古今名家尺牘文選……太田才次郎君編
- 第拾七編◎古今名家文選……武田櫻桃君編
- 第拾八編◎新體詩作法……河井醉茗君著
- 第拾九編◎新體漢文軌範……久保天隨君著
- 第貳拾編◎古今才媛文集……近藤正一君編
- 第貳拾壹編◎美辭類語集……久保天隨君著
- 第貳拾貳編◎短歌作法……窪田空穗君著
- 第貳拾參編◎俳句作法（續刊）……内藤鳴雪君著
- 第貳拾四編◎小說作法（近刊）……田山花袋君著

全部廿四冊
洋裝四六判並製紙數一冊約三百頁以上

【定價】
一冊金參拾五錢
六冊金壹圓九拾錢
十二冊金參圓七拾錢
廿四冊金七圓廿錢
郵稅一冊金六錢宛

（博文館發行）

十五版

增補 詠歌自在

本書は故佐々木弘綱翁の著にして、息信綱君に增補を請へるもの、初學を導くこと最懇篤なり、其特色とする所は、歌題を改良して當世に適せざるを省き新題を載せ、且つ作例の歌を精選せるにあり、而して其體裁は先づ題の作法を示し、次に句の順序に從ひて歌詞を載せ作例を擧げ、附錄としては歌論及假名辭典あり、又當代の能書多田親愛先生の製紙色紙短冊詠草等の書式を載せたる如き、實に是れ辭上花を添ふるもの、歌道に志すの士は必らず一本を座右に備へ賜ふべし。

全一冊洋布中判金文字入
紙數七百八十頁
正價金壹圓
郵稅金拾貳錢

八版

詠歌辭典

此書は詠歌社會に最も名ある、佐々木先生の編纂せるものにして、雅語俗譯辭典には萬葉集廿一代集の解し難き語七千百六十字を載せ、俗語雅譯辭典、熟語辭典は共に歌よむ人の寶庫と云ふべきもの、假字格辭典にはあらゆる假名遣を載せ、枕詞辭典には枕詞の解釋を掲げ、尙附錄として小文典を添へたれば、遊士歌人の缺くべからざる寶典と謂ふべし。

全一冊洋布中判金文字入
紙數一千三百七十六頁
正價金七拾五錢
郵稅金八錢

十六版

百人一首講義

全一冊中判美本
紙數三百頁
正價金貳拾錢
郵稅金六錢

發兌元 東京本町 博文館

佐々木弘綱君 佐々木信綱君校註

日本歌學全書

全部十二冊 中判洋裝頗美本
紙數一冊四百二十頁以上
正價 ◎一冊貳拾五錢◎六冊金壹圓參拾錢◎十二冊金貳圓五拾錢◎郵稅一冊金六錢

—(目次)—

第壹編 ○古今和歌集○躬恒家集○友則家集○貫之家集○忠岑家集
第貳編 ○後撰和歌集○元輔家集○順家集○能宣家集○天德歌合
第參編 ○拾遺和歌集○紫式部家集○公任卿集○清少納言歌集
第四編 ○後拾遺和歌集○相模家集○經信卿母集○高陽院歌合
第五編 ○金葉和歌集○詞花和歌集○堀川百首
第六編 ○千載和歌集○永久百種○忠度朝臣集○後京極自歌合
第七編 ○新古今和歌集○自讚家○鴨長明集
第八編 ○林下集○源三位頼政集○山家集○金槐集
自第九編至第拾壹編 萬葉集上、中、下三冊
第拾貳編 ○悅目抄○無名抄○歌がたり○にひまなび○新學異見○歌ぶくろ○調の直路

—(發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 振替貯金口座第二百四十番 博文館)—

佐々木信綱大人校註

續日本歌學全書

第壹編◎加茂眞淵翁全集(上)
第貳編◎加茂眞淵翁全集(下)
第參編◎本居宣長翁全集
第四編◎香川景樹翁全集(上)
第五編◎香川景樹翁全集(下)
第六編◎小澤蘆庵翁全集

—(全部十二冊 正價 洋裝四六判美本 紙數一冊五百頁以上 ◎一冊金參拾五錢◎六冊金壹圓九拾錢◎十二冊金參圓七拾錢◎郵稅一冊金八錢)—

第七編◎近世名家々集(上)
第八編◎近世名家々集(下)
第九編◎近世長歌今樣歌集
第拾編◎桂園門下集
第拾壹編◎明治名家歌集(上)
第拾貳編◎明治名家歌集(下)

曩に萬葉以下の古集を校して歌學全書十二編を發行し頗る斯道に貢獻する所あり今又江戸時代歌道中興以後の家集を編錄して以て完璧となすものなり

—(發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館)—

(六)

文學博士萩野由之君、池邊義象君、落合直文君校訂

日本文學全書

第一編◎竹取物語◎伊勢物語◎住吉物語◎徒然草◎紫式部日記
第二編◎土佐日記◎枕草紙◎更科日記◎方丈記
第三編◎十六夜日記◎浜千鳥物語◎辨内侍日記
第四編◎とりかへばや物語◎堤中納言物語◎四季物語
第五編◎中務内侍日記◎蜻蛉日記◎讃岐典侍日記◎和泉式部日記
第六編◎濱松中納言物語◎大和物語◎唐物語
第七編◎宇治拾遺物語◎多武峯少將物語

全部廿四冊 洋裝中判頗美本 紙數一冊四百餘頁
正價一冊金貳拾五錢◎五冊以上八分引 拾冊以上一割二分引◎十二冊以上一割五分引(郵稅一冊金三錢宛)遞信省認可

第八編 自第十二編至第十三編
源氏物語(五冊二分冊)
第十三編 自第十五編至第十六編
榮花物語(上、中、下三冊)
第十六編 自第十八編至第十九編
太平記(上、中、下三冊)
第十九編◎保元物語◎平治物語◎秋夜長物語◎續群書類從合戰物語
第二十編◎平家物語
第廿一編◎古今著聞集
第廿二編◎公事根源◎十訓抄
第廿三編◎水鏡◎大鏡
第廿四編◎增鏡

發兌元 東京本町 博文館

고-2P-63

文學士　大町桂月君著　—(二十六版)—

美文韻文

黃菊白菊

全一冊袖珍上製
紙數四百二頁
正價金貳拾五錢
郵稅金六錢

桂月先生の文は雙眼を動かすこと久し悲慨の聲を發しては秋風の老松に漱するが如く哀痛の音を吐きては孤獨の幽調に叫ぶが如く句々血を吐き字々玉を綴る麗にして沈痛優にして豪宕是れを一讀すれば人の思を清くし感情を純潔ならしむ洵に是れ一代の才筆文壇の珍品たり

鹽井、大町、武島三文學士合作—(廿八版)—

美文韻文

花紅葉

全一冊袖珍上製
紙數四二二頁
正價金參拾錢
郵稅金六錢

天に春花秋葉の文あり人間又美文辭なからざるべけんや鹽井雨江武島羽衣大町桂月三文學士の文名江湖に傳ふ今其錦心繡腸を吐いたるもの即ち此册子となる世の花を愛み月を樂しむの士必ず本書なかるべからず

永井荷風君著

あめりか物語

全一冊中判特製
紙數四百九十頁
正價金六拾五錢
郵稅金八錢

卷中目次

○船室夜話○野路のかへり○岡の上○醉美人○長髮○春と秋○雪のやどり○林間○惡友○舊恨○廢墟○めゝ○夜の女○一月一日○曉○市俄古の二日○夏の海○夜半の酒場○落葉○支那街の記○夜あるき○六月の夜の夢○附錄フランスより○船と車○ローン河のほとり○秋の巷、

大和田建樹君著　—(二十版)—

散文韻文

雪月花

全一冊袖珍上製
紙數六百五十頁
正價金參拾五錢
郵稅金六錢

其文は清楚婉麗、趣味掬すべく、其歌は優雅流滑奇想天外より來りて、句々風を生じ、言々花を降らすものは大和田建樹先生の筆となす。此編收むるところ近作貳百編蒐し落寞振はざる今日の文學界中の旗鼓たるものは此書を措きて他に又何かある

博文館發行

95
50

086264-000-0

95-50

短歌作法

窪田　空穂／著

M42
DBD-1033